

III 2002年度の調査報告

00201 農学部2号館改修工事に伴う調査 (樽味遺跡7次調査)

調査地点 松山市樽味3丁目5番7号
愛媛大学樽味団地(図2)

調査面積 170m²

調査期間 2002年4月3日～5月23日

調査の種別 本格調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄

らに日本測地系平面直角座標系N系に基づいた5m毎に区割り、調査を進めることとした(図20)。

I区：樽味団地の正門西にある守衛室西側から農学部2号館までをつなぐ電気・通信管路部分の調査区。幅1.5m、長さ48mを測る。IA～IJ区に区画される。

II区：農学部本館と2号館に囲まれた中庭北西部に埋設される污水管路部分の調査区。

III区：II区と同じく、農学部本館と2号館に囲まれた中庭の南西部に敷設される污水管路部分にあたる調査区。

IV区：三科実験室建物と農学部本館をつなぐ電気・通信管路部分の調査区。

V区：IV区東側に位置する污水管路部分の調査区。今次調査では、狭い調査範囲にもかかわらず、古墳時代後期および古代後期～中世前期の多くの遺構が出土した。調査区ごとに表6に整理した。これらは、後述するように、樽味団地基本層序のⅢ層を掘り下げ中に確認できた灰褐色系の埋土をもつ土壙・小穴と、樽味団地基本層序のⅣ層上面で検出できた黒褐色～暗褐色の埋土の土壙・小穴・自然河道などに大別できる。

1 調査にいたる経緯

農学部2号館の改修工事に伴い、電気・通信・排水の管路の敷設設計図が施設部から埋蔵文化財調査室に提示された。埋蔵文化財調査室では、既往の調査成果から、計画されている管路周辺には埋蔵文化財が分布し、工事により影響が生じると判断し、施設部と協議を重ね、管路部分の発掘調査を実施することになった。樽味遺跡7次調査(調査番号：00201)である。

2 調査の概要

今回の調査では、電気・通信・排水の管路を埋設するため、細長い調査区となっている。そのため、以下のように、敷設される管路を北からI～V区とし、さ

表6 00201調査(樽味遺跡7次)遺構一覧

調査区	調査区	遺構番号	総数	備考
I区	堅穴式住居(SC)	SC-17・28・50	3	※9・10・16・
	掘立柱建物(SB)	SB-77(SP-54・56で構成)	1	25・49・52・
	土壙(SK)	SK-1・7・19・51・55・61・63・64・69	9	62・72・73号
	溝(SD)	SD-8・18	2	遺構は欠番。
	自然河道(SR)	SR-13	1	
	土器溜まり(SX)	SX-29	1	
	小穴(SP)	SP-2～6・11・12・14・15・20～24・26・27・30～48・53 ・54・56～60・65～68・70～71・74～76・78～89	63	
II区	堅穴式住居？		1	
III区	遺構は検出されていない。			
IV区	自然河道(SR)	SR-101・102	2	
V区	掘削予定の深度までには遺構は検出されていない。			

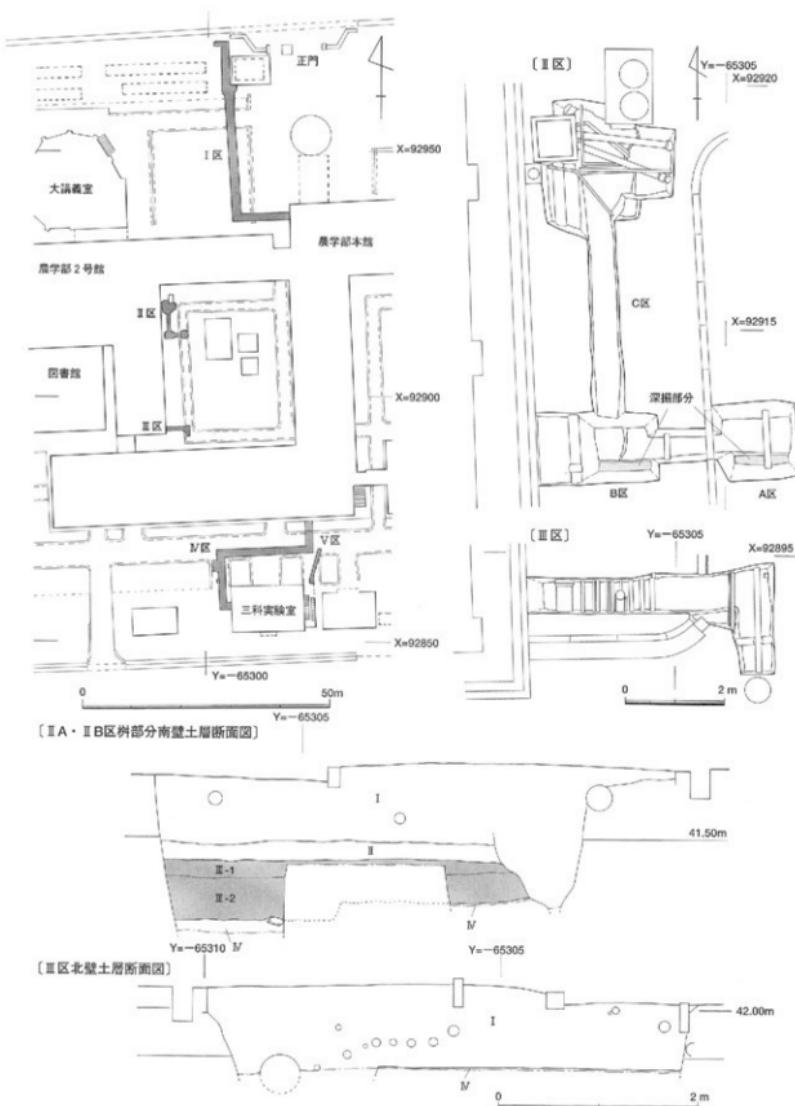


図20 00201調査（梅味遺跡7次）位置図、II・III区全体図およびII・III区土層断面図（縮尺 1/1,000, 1/100, 1/50）

前者からの出土遺物は、土師器や陶磁器の碗皿類などがあり、古代～中世の遺構である。後者の遺構からは、基本的には古墳時代（5～6世紀）の須恵器や土師器が出土し、当該期の遺構と考えられる。この他、Ⅲ層からは、弥生時代中期の土器や8世紀代の須恵器が出土したが、5～6世紀の遺物がもっとも多い。

（1） I区の概要（図21、写真65～78）

I区は南北に長く、大講義桟や自転車置場への通路を確保するために、I A～I F区とI G～I J区に二分して調査を進めざるを得なかった（写真65・67・69）。そのため、SR-13の最上層に堆積する土層（後述するSR-13①層と②層）をⅢ層と誤認するなどの混乱が生じた。そこで、I区の調査の最終段階に、層序関係の再検討を行い、現地で層序番号や出土遺物の取り上げ層序の読み替えを行った。そのI区の層位は、以下の通りである。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土。

Ⅱ層：造成以前の近世～近代の水田層で、上部の灰オリーブ色砂質シルトの耕作土層にあたるⅡ-1層と、下部の同質・同色であるがマンガンが沈着した床土層にあたるⅡ-2層に分層できる。

Ⅲ層：黒色～暗褐色系の土層で、後述するSR-13①層によってⅢ-1・Ⅲ-2層とⅢ-3層に分層できる。

Ⅲ-1層は暗灰黄色砂質シルト、Ⅲ-2層は砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトである。Ⅲ-1・Ⅲ-2層は、Ⅲ層に区分したが、土色はⅡ層に近似し、層序的にはSR-13の上部に堆積した土層で、本来Ⅱ'層として分層することが適当な堆積物である。また、土質的には水田層の可能性が高い。また、Ⅲ-1層とⅢ-2層からは、弥生時代～中世までの遺物が混在する状態で出土している。

Ⅲ-3層は、暗褐色砂質シルトで、下半部はⅣ層の砂礫を含む褐色シルトが混じり、Ⅳ層へ漸移的に移行する。I G～I J区のⅢ層は、土質・土色の特徴がⅢ-3層と共通し、これに対応する堆積物と考えられる。Ⅲ-2層上面で遺構検出に努め、中世以降の灰褐色系の埋土をもつ土壌・小穴を確認できた。Ⅲ-3層中から出土する遺物は、古墳時代後期の須恵器・土師器が圧倒的に多いが、これに弥生

土器壺の底部片、古代～中世の土師器皿、土鍋の脚部片、綠釉陶器片が混じる。

IV層：小指先～拳大の円礫や小砾を多く含む褐色シルトで、基本層序Ⅳ層でも下部を構成する堆積物である。IV層上面で、Ⅲ層を掘り下げ中に見逃した灰褐色系の埋土をもつ中世の小穴の一部と、黒褐～暗褐色の埋土の古墳時代～古代の土壌・小穴・自然河道を検出した。IV層自体には遺物は含まれていない。

V層：SR-13はIV層下に堆積したV層まで削り取っている。SR-13下半部の壁面では、標高40.5～41.0mで、人頭大の花崗岩の円礫が混じる褐色の礫層であるV層を確認できた。V層からは遺物は出土していない。

I区で出土した遺構には、1～89の遺構番号を付したが、この中の9・10・16・25・49・52・62・72・73号遺構は、他の遺構の埋土の一部を誤認したり、重複して遺構番号を付したために、欠番とした。したがって、I区で検出した遺構の総数は80である（表6）。さらに、これらの遺構は、以下のa～dの類型の埋土をもつ遺構に区分できる。

a：やや白っぽくツヤのある灰色シルト質土や、灰色みを帯びた褐色砂質シルト質土ないし暗褐色シルトを埋土とする。層位関係から判断すると、近世以降の遺構である。

b：灰色みを帯びた埋土をもつ遺構で、灰褐色微細砂が混じって全体に灰色みがかった埋土のSD-18も含まれる。層位関係と出土遺物から、古代後半期～中世の遺構と考えられる。

c：黒みの強いシルトないし砂質シルトを主体とする埋土をもつ遺構。出土遺物は、弥生時代中期～後期の土器が混じるが、古墳時代後期の土師器や須恵器が大半で、古代以降の遺物は出土していない。古墳時代以前の遺構である。

d：クロボク土のサラサラしてしまりがない埋土の遺構。

① 近世の遺構

a類型の埋土をもち近世以降と考えられる遺構には、SK-1・7・SP-2～6・11・12・22・23・81・84・85がある（写真66）。

② 古代・中世の遺構

b類型の埋土をもつ古代～中世の遺構には、SD-8・18と、SP-14・15・21・27・31～48・57・74～76・

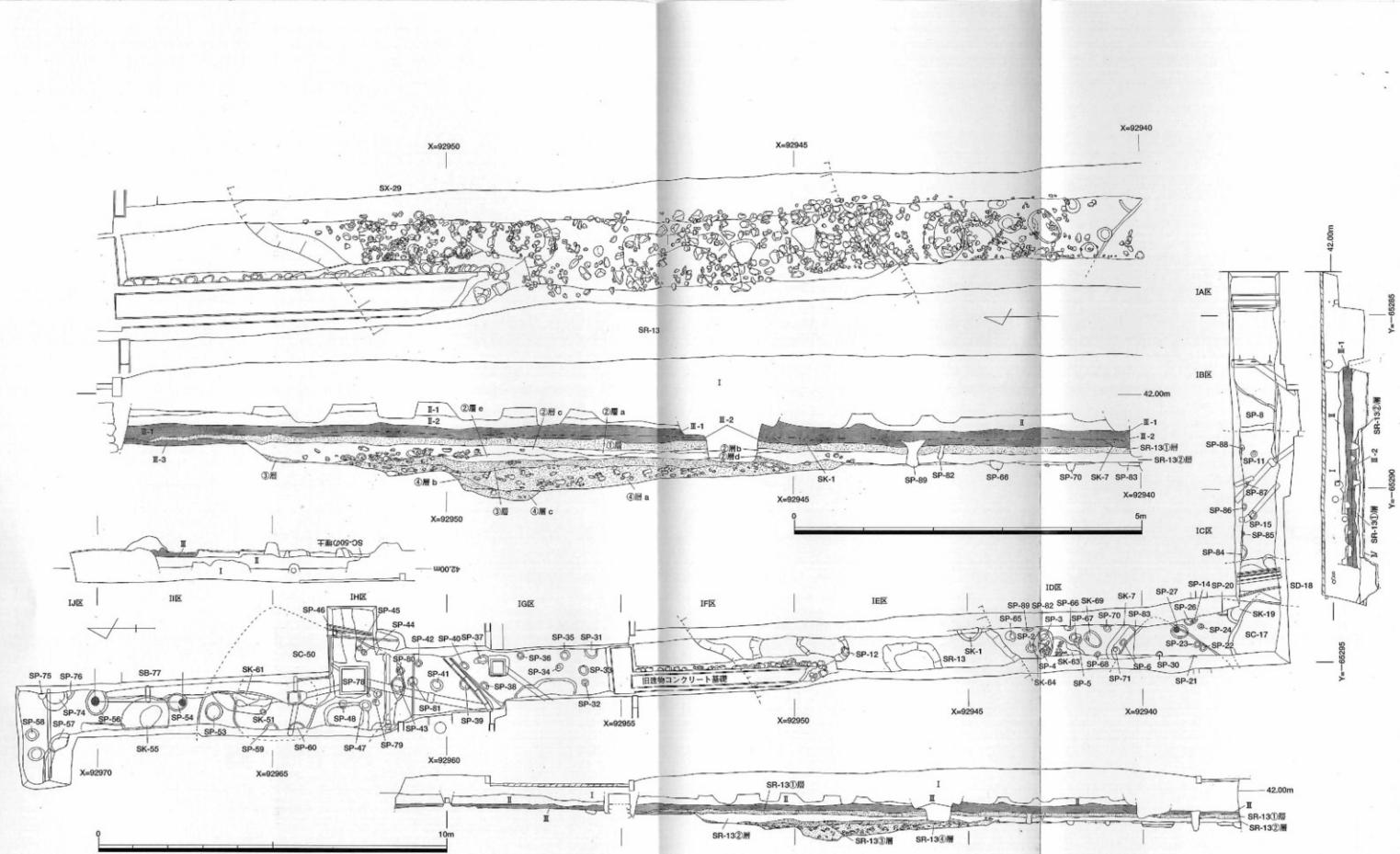


図21 00201調査（樽味遺跡7次）I区実測図およびSR-13・SX-29実測図（縮尺1/100、1/50）



写真65 00201調査（樽味遺跡 7次）
I C～I J区完掘（南から）



写真66 00201調査（樽味遺跡 7次）
I D・I E区Ⅲ-1層
上面検出遺構（北から）

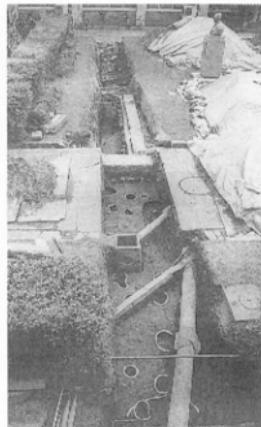


写真67 00201調査（樽味遺跡 7次）
I C～I G区完掘（北から）



写真68 00201調査（樽味遺跡 7次）
I A～I C区完掘（南から）



写真69 00201調査（樽味遺跡 7次）
I B・I C区北壁土層（南西から）



写真70 00201調査（樽味遺跡 7次）
I 区SD-8（南から）



写真71 00201調査（樽味遺跡 7次）
I 区SC-17土層（北東から）

86・88・89がある。

その中で、SD-8・18は、I B区と I C区で南北方向に延びる溝である。SD-8は、自然流路の可能性もあるが、III-1層とIII-2層の層界部分から掘り込まれ、SR-13の埋土を切る。溝底には暗灰褐色砂層が幅20cm前後帶状に南北に延びる。埋土下部の砂礫層は、粗砂や細砂の薄いレンズ状のラミナが確認でき、流水があつたものと考えられる（写真70）。

SD-18は、SR-13①層を除去後、SR-13②層を掘り下げ中に確認した。調査区北壁面では、SR-13①層下面から掘り込まれている。また、SC-17を切り、調査区北壁面でSK-19を切ることが確認できる。溝の断面形は逆台形で、溝幅は1.3m前後、検出面からの深さは45cmほどを測る。埋土上部には、砂礫混じりの暗褐色砂質シルトの①層、暗褐色砂質シルトに薄いレンズ状の灰色細砂層を含む②層が見られ、下部には灰褐色微細砂層の③層、径3～5cmの花崗岩や砂岩の円礫が多く混じる砂礫層が堆積する。

柱穴・小穴のうち、SP-27では立柱痕跡を確認でき、SP-39の底面からは、黒色土器の比較的大きな破片2点が折り重なって出土した（写真75）。

③ 古墳時代以前の遺構

c類型の埋土をもつ古墳時代以前と考えられる遺構には、竪穴式住居（SC-17・28・50）、掘立柱建物（SB-77）、土壙（SK-19・51・63・64・69）および倒木痕（SK-55・61）、自然流路（SR-13）、土器溜まり（SX-29）、小穴（SP-20・24・30・54・56・59・60・65～68・70・71・78～80・83）がある。

SC-17は、I C区の管路が折れ曲がる部分で、SR-13②層を除去後に検出した。角が丸いや矩形の竪穴式住居と考えられる。SD-18に切られる。埋土中から、古墳時代後期の土器類甕部片や須恵器坏などを含む須恵器・土器類の細片が出土している。また、貼床部分からも、古墳時代後期の須恵器坏身口縁部片が出土している（写真71）。

SC-28は、I C区と I D区の境界部に位置する隅丸方形と考えられる竪穴式住居である。SP-30が床面から掘り込まれているが、柱穴とするには小さすぎる。埋土中からは、拳大の花崗岩の円礫が多く出土とともに、土器類甕部片、須恵器坏部片が出土。貼床部分からは、須恵器坏身の底部の大形破片が出土。

SC-50は、I H・I I区で、SP-48・SK-51などを抜んで確認できた落ち込みラインをつなぎ、一辺5mほ

どの隅丸方形の竪穴式住居を考えた。調査区壁面で、III層の途中から、掘り込みを確認できる。床面は2～5cmほどの緩やかな凹凸に富む。床面でSP-78・79を検出したが、小さく柱穴とは考えられない。床面で検出したSK-51から弥生土器や古墳時代後期の土器類の甕部片、SP-48からは古墳時代後期と考えられる土器類の胸部破片が数点と、滑石製有孔円錠1点が出土した。

また、I I区北半部でSP-54と、I I区と I J区の境界部でSP-56を、IV層上面で確認したが、ほぼ同径の柱痕跡が確認され、近接して他に柱痕跡を持つ小穴が見あたらないので、SB-77とした。柱痕跡間は2.5mを測る（写真76～78）。

自然流路SR-13は当初、I B～I F区でIII-1・III-2層を掘り下げ、I F区以南で砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルト（後のSR-13①層）の広がりとして確認した。それを除去した後、I F区中央部でIII-3層を切る落ち込みラインを検出した。しかし、南側では対応するラインを検出できず、III層が自然に落ち込んだ可能性を考え、前述の砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルト層をIII-1～3層、I F区中央部以南の落ち込みを埋める黒褐色土層をIII-4・5層として、10cmごとに人工的に層位を区切って調査を進めることとした。黒褐色土層を掘り下げると、I B～I D区中央部では基本層序のIV層があらわれ、I D区北端部でI F区中央部に対応する落ち込みラインを検出できた。この幅6～7mほどの間は、黄灰色粗砂と大量の拳大の花崗岩・砂岩の円礫が埋積されている（写真72）。そこで、自然流路SR-13として、以後、調査を進めるとした。しかし、混乱を避けるため、それまでIII-2～5層に統け、黄灰色粗砂層をIII-5層最下部、拳大の花崗岩・砂岩の円礫層とし、調査終了後に、以下のようにSR-13埋土①～④層に振り替えた。

①層：調査時にIII-2・III-3層とした砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルトである。I F区中央部より南側全面に広がり、SR-13の最上面を覆う。

②層：調査時にIII-4・III-5層とした黒褐色土層。①層と同じく、I F区中央部より南側全面に広がる。さらに、a～e層に分層できる。

②-a層：砂礫混じりの黒褐色シルト層。

②-b層：薄くレンズ状に堆積する灰黄色粗砂層。



写真72 00201調査（櫛味遺跡7次）
I区SR-13④層上面
の礫群検出状況（北から）



写真73 00201調査（櫛味遺跡7次）
I区SR-13②層中
検出のSX-29（北から）



写真74 00201調査（櫛味遺跡7次）
I区SR-13完掘（南から）



写真75 00201調査（櫛味遺跡7次）
I区SP-39遺物出土状況（西から）

②-c層：I F区のSR-13が南に向かって落ちる部分に堆積する黒褐色粘質シルト層。

②-d層：砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。
灰黄色粗砂の薄いレンズ状のラミナを観察できる。

②-e層：②-d層と同じく、砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、灰黄色粗砂の薄いレンズ状のラミナを観察できる。

③層：調査時にⅢ-5層最下部とした黄灰色粗砂層。

④層：調査時にⅢ-5層下砂礫層とした拳へん頭大の花崗岩・砂岩の円錐からなる砂礫層で、土石流による堆積物である。

この中で、SR-13の埋土上部にあたる①・②層は、I F区より南側に広く分布する。出土遺物は古墳時代後期の遺物が圧倒的に多い一方で、古代～中世の遺物が少量混じる。当初、古代～中世の遺物は①・②層の掘り下げ中に見逃した小穴などの小規模な遺構の遺物である可能性を考えたが、②層の下面で検出したSP-26やSP-27から中世の土師器が出土することから、

①・②層の堆積時期は古代～中世と判断した。

これに対して、埋土下半部にあたる③・④層は、I D区北端部～I F区中央部の幅6～7mほどの落ち込み内に堆積している。古墳時代後期の土師器の壺・高杯・把手・須恵器の短頸壺・壺蓋・壺身・底部破片、弥生時代後期中葉の壺底部片・砥石・縁泥片岩片など、弥生時代中～後期と、古墳時代後期の遺物が出土している。とくに、古墳時代後期の遺物が圧倒的に多く、それ以降の遺物は含まれていない。また、②-c層が堆積するSR-13が南へ向かって落ちるI E区とI F区の境界付近では、完形に近い須恵器・土師器が集中して投棄されていた。上流域から流されてきた弥生中期土器の小片も混じるが、一括して投棄された状況なので、SX-29とした（写真73）。

こうした堆積物の分布状況と出土遺物から、SR-13は古墳時代後期に埋没する自然河道である（写真74）。SR-13は、古墳時代後期に土石流によって③・④層が堆積することで埋没し、その後、長期間、窪地状態が続き、そこに古代～中世に①・②層が堆積し、平坦な



写真76 00201調査（樽味遺跡7次）I区
SB-77（西から）



写真77 00201調査（樽味遺跡7次）I区SP-56
土層（西から）



写真78 00201調査（樽味遺跡7次）I区SP-54
土層（西から）



写真79 00201調査（樽味遺跡7次）
II区調査状況（北東から）



写真80 00201調査（樽味遺跡7次）
III区完掘（南西から）



写真81 00201調査（樽味遺跡7次）
IV区完掘（東から）



写真82 00201調査（樽味遺跡7次）
IVC・IVD区SR-101土層
(北東から)



写真83 00201調査（樽味遺跡7次）
IVE・IVF区SR-102土層
(北西から)



写真84 00201調査（樽味遺跡7次）
V区完掘（北から）

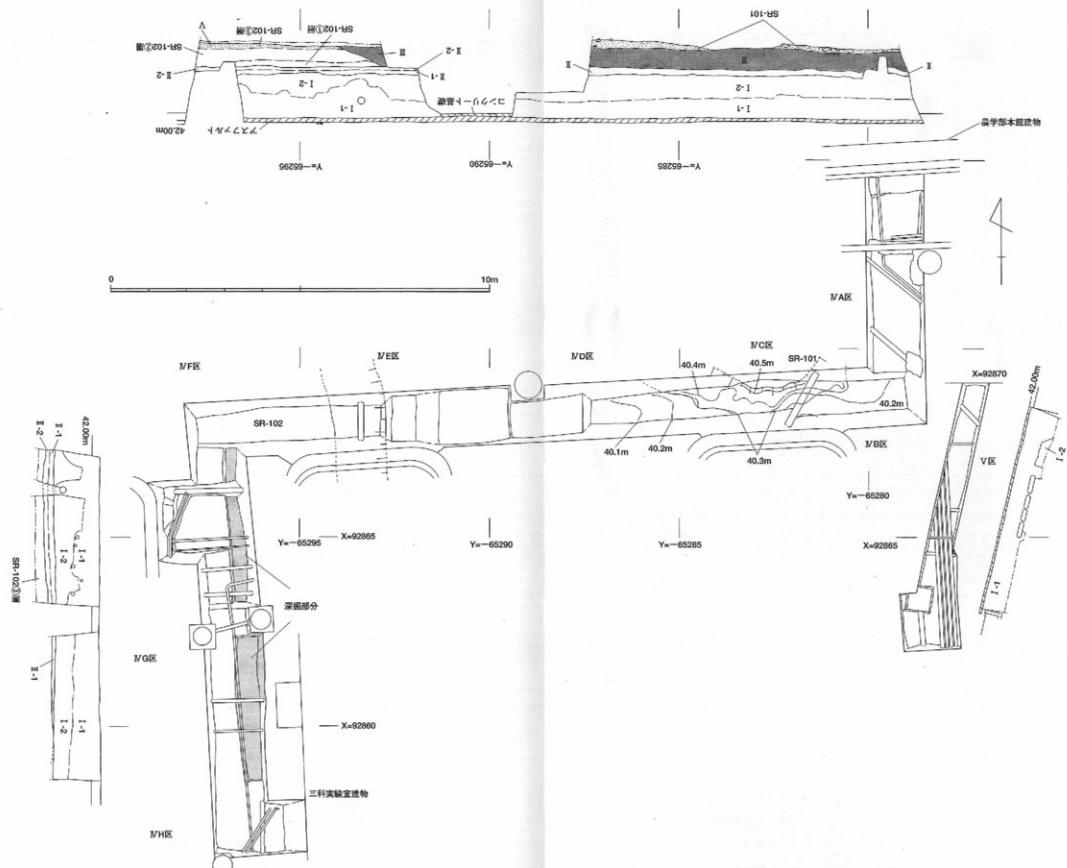


図22 00201調査（樽味遺跡7次）IV・V区実測図（縮尺 1/100）

地形面となると考えた。

この他、d類型の埋土をもつ遺構としてSK-55・61がある。埋土の堆積状況から倒木痕と考えた。出土遺物はなく、時期不明。

(2) II区の概要 (図20、写真79)

II A区とII B区では、造成土層であるI層が地表下65~70cmまで見られ、その下層に樽味団地が造成される以前の灰色系の近世~近代の水田層があらわされた。また、II C区では既設の配管が多数見られ、地表下70cmで調査を終わった。いずれも表土層であるI層の途中までに留まる。今回の工事で計画されている掘削深度は道路面から70cmで、工事による影響が及ばないが、将来予想される工事に対応するため、II A区とII B区でIII層の深度や遺構の有無を確認することとした。

その結果、II A区では、地表下85cmでやや灰色みを帯びた暗褐色粘質土層であるIII-1層、105cmで暗褐色粘質土層であるIII-2層を検出した。さらに、南壁に沿って、幅25cmほどを深掘りし、II A区では地表下145cm、II B区では125cmで、樽味団地基本層序のIV層があらわされた。

II A区では、III-1層から中世の土師器皿、土鍋口縁部片が出土している。III-2層からは古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が見られ、とくにIII-2層下部では、須恵器壺蓋・高杯・土師器甕の口縁部など、比較的大型の破片が集中して出土した。これに対して、II B区では、III-1層から古墳時代後期~中世の土師器・須恵器の細片が出土し、III-2層からは古墳時代後期の須恵器・土師器の胴部片が出土するが、II A区と比べて細片化したものばかりで、量も少ない。こうした遺物の出土状況と、IV層があらわれる高さに約20cmの違いがあることから、II A区深掘り部分が何らかの遺構であることが考えられる。近接する樽味遺跡3次調査地点では、古墳時代後期を中心とする堅穴式住居が発見されており、III-2層下部は、それらと同じ時期の遺構の埋土と考えられる。

II C区では、土師器の胴部片1点がI層中から出土したのみである。

(3) III区の概要 (図20、写真80)

III区では、表土剥ぎを開始すると、地表下30~40cmで給水・排水・ガス管が多数あらわされた。工事掘削が計画されている地表下70cmまで掘り下げたところ、IV層があらわされた。IV層上面を精査し遺構検出に努めたが、遺構・遺物ともに出土しなかった。

(4) IV区の概要 (図22、写真81~83)

IVD区西半部~IVE区東半部に調査区を横断してコンクリート床が貼られ、これを撤去できないため、調査を行ったのは、IVB区~IVD区東半部と、IVE区西半部~IVF区である (写真81)。

表土剥ぎの時点でのIVB区東端の深掘りでは、地表下125cmでII層があらわされた。IVG区で近代陶器片、古墳時代後期の土師器・須恵器の胴部片が数点出土。また、地表下140cmでIII層があらわされた。IVB区~IVD区東半部のIII層下では、北から南に向かって落ち込むIV層を検出した。IV層の落ち込み部分には、15~25cmの厚さで暗褐色粗砂層が堆積している。自然流路と考え、SR-101とした (写真82)。古墳時代後期の須恵器壺蓋部片・土師器甕の胴部片が10片程度出土し、当該期に埋没するものと考えられる。

一方、IVE区西半部~IVF区では、III層を切り込む自然流路SR-102を検出した。流路底は基本層序のV層に対応する砂礫層に達する。III層上面から流路底までは、IVF区西端で30cmを測り、ごく緩やかに西に向かって深くなる (写真83)。埋土は①~③層に分層できる。IVF区の②層下部から、古代末~中世前期の土鍋の口縁部片をはじめ古墳時代の須恵器や土師器の細片、IVE区の②層と③層の層界部から、古代末の土師器甕・古墳時代須恵器壺蓋天井部の比較的大型の破片が出土している。最下層の③層の砂礫層中からは、器面の荒れが著しい土師器細片が1点出土したのみである。古代末~中世前期に埋没する自然流路である。

(5) V区の概要 (図22、写真84)

V区では、地表下60cmまで掘り下げたところ、多くの管路があらわされた。工事で掘削される深度は地表下100cmであるが、近接するIVB区の土層観察では、地表下120cmまでI層の表土である造成土層が統くので、慎重工事を行うことを依頼し、調査を終了した。遺物は出土していない。

3 調査のまとめ

今回は、細長い管路部分と限られた範囲の調査であったが、これまで点的な調査しか行われていなかった樽味団地西半部における遺跡の分布の実態を検討できるデータを得ることができた。

まず、I区では古墳時代後期・古代後半~中世前期、近世以降の数多くの遺構、II区では古墳時代後期の遺構と考えられる落ち込み、IV区では古墳時代後期と古

Y=-65350

Y=-65300

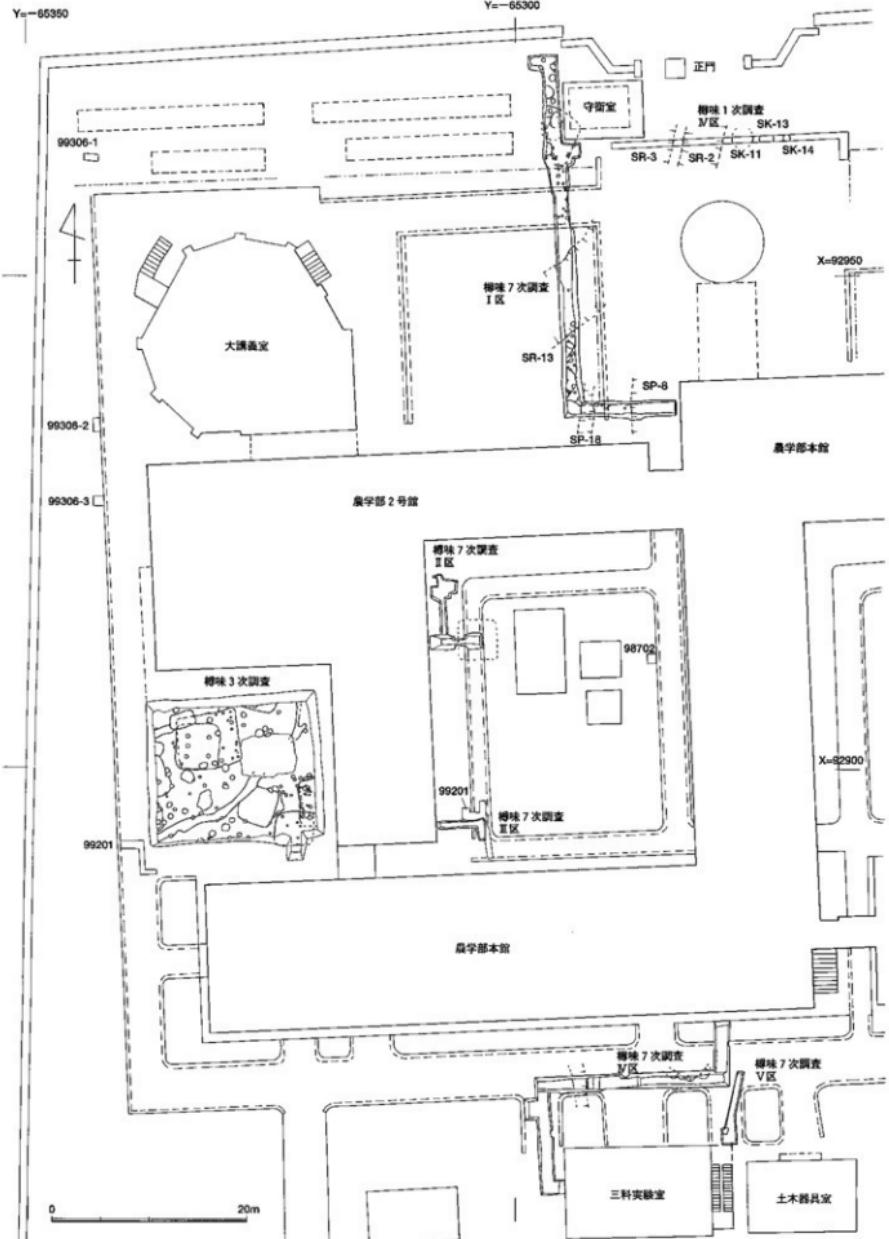


図23 梅味団地北西部の検出造構分布図（縮尺 1/500）

代後半～中世前半に埋没する自然流路を確認できた。遺跡は、椿味団地を越えて、北側の椿味立添遺跡、西側の椿味高木遺跡や椿味四反地遺跡まで、面的に連続して伸びることが確認される。

とくに、古墳時代後期には、ほぼ同時期の竪穴式住居や掘立柱建物などが、今次調査区だけではなく、椿味遺跡3次調査や、椿味立添遺跡、椿味高木遺跡でも確認され、東側に位置する1次調査IV区では、古墳時代後期に埋没するSR-2・3が発見されている。この中で、SR-2・3は、埋積土が灰色砂礫土であること、

遺物がそれほど磨滅していないことから、Ⅲ～Ⅳ層を切り込みながら一時的に流路を変更しながら流れていたことが指摘されている。今次調査I区で確認できたSR-13も同様な堆積状況で、これに対応する自然流路と言える（図23）。

さらに、古代後半～中世前期には、I区SR-13が埋没した窪地に砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルトが埋積し、平坦な地形面が形成される。この土層は、ほぼ水平に堆積し、窪地に自然堆積する土層とは考えられず、水田層である可能性が高い。（田崎）

00202 (城北) 情報教育棟新営工事に伴う調査 (文京遺跡25次調査)

調査地点 松山市文京町3番
愛媛大学城北団地（図1）
調査面積 1,022m²
調査期間 2002年6月1日～12月18日
調査の種別 本格調査
調査担当 吉田広・三吉秀充
依頼文書 施設部施設部長発事務連絡
(平成14年4月5日付)

1 調査にいたる経緯

総合情報処理センター北側に、情報教育棟が新営されることとなった。総合情報処理センター新営時の文京遺跡18次調査（調査番号：99802）では、古代末から中世にかけての水田遺構が確認されており、情報教育棟新営地点においても、この水田遺構の広がりが予測され、情報教育棟新営地全域を対象として、事前全面調査を行うこととした。文京遺跡25次調査（調査番号：00202）である。

2 調査の概要

調査地点は、文京遺跡18次調査北側に連続し、調査面積は1,022m²。

城北団地基本層序であるI・II層を重機で取り除いた後、以後手作業で掘り下げを行った。I層は地表下150cm前後まで及び、一部は練兵場時代の演習用塹壕で深く掘り返され、演習用薬莢などが出土している。

II層は近代の遺物を含む水田層で、浅黄色からにぶい

黄色砂質土。調査区東壁で30cm前後の厚さがあり、以下のの中世水田層と土層的には連続する。

近代の遺物を含まなくなり、土質もややしまり始めるのが中世以前の水田層で、黄褐色砂質～シルト質土。先の18次調査で確認していた3枚の水田面を、ほぼ全域で確認した。

水田層以下は、下層水田の床土となるシルト質土層があり、10世紀後半までの遺物を含む。さらにその下に、砂・砂礫層が厚く堆積し、一部ではIV層の高まりを認められるものの、調査域の大半は、建物基礎掘削深度である地表下300cmにいたっても、まだ遺物を含む砂・砂礫層が続く。

以下、3枚の水田遺構と、その下の自然流路と旧地形について、概述する。

（1）水田遺構

水田遺構は、18次調査で確認した上層・中層・下層の3枚がやはり今回の調査でも確認できた。

① 上層水田（図24、写真85）

13世紀頃の水田遺構で、調査区全面に遺構が広がる（SS-1～4・6～14・17～20・24～40・42・43、SX-15、SD-5・23・41）。ただし、練兵場時代の塹壕などの擾乱が多く残ること、II層との分離が一部不明瞭なこと、加えて水田面の比高差が調査区内で15cm程度と小さいこともあって、水田の畦畔が明確でなく、並びが不整。南側18次調査検出の水田遺構と整合しない箇所もある。

DT区以東の調査区東部は、南北に階段状に水田が

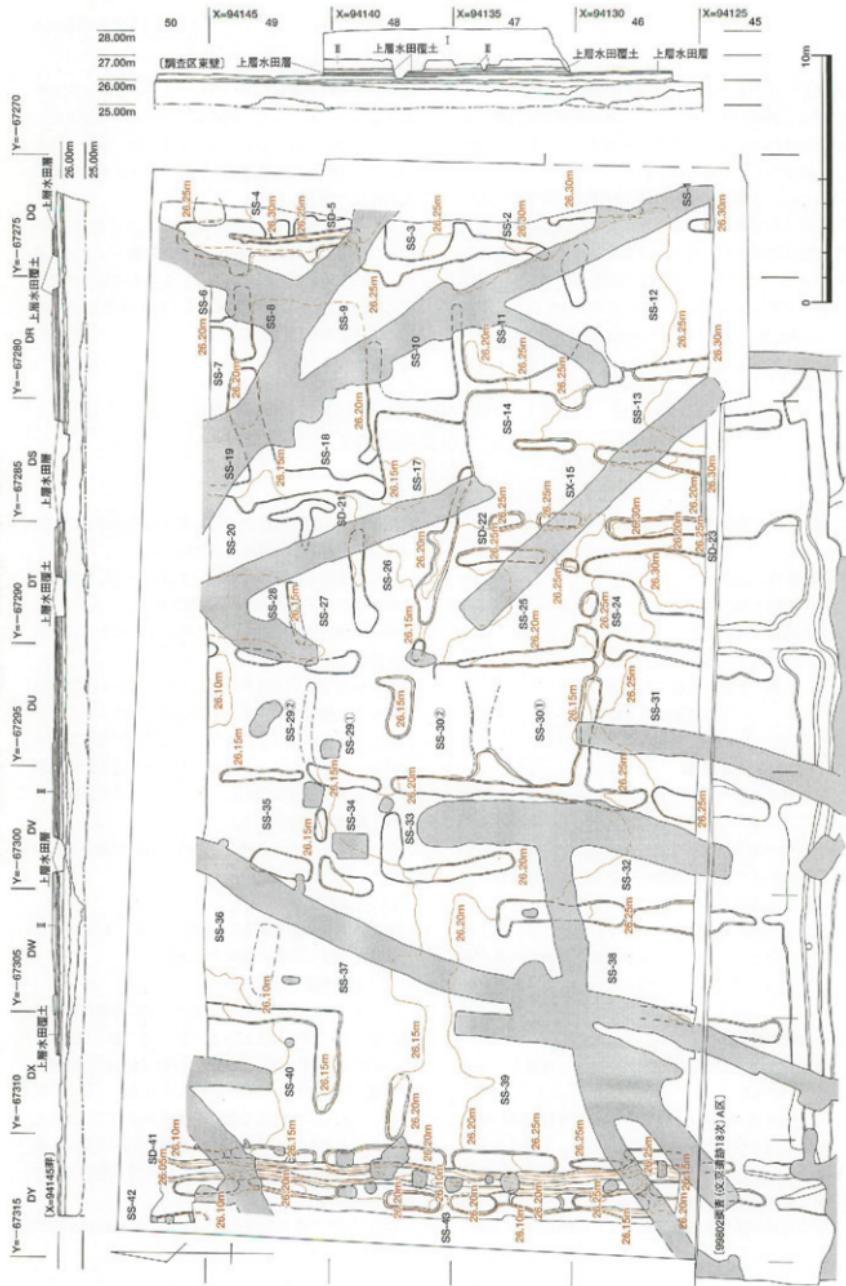


図24 00202調査(文京遭跡25次) 上層水田(縮尺1/200)



図25 002調査 (文京: 滞路25次) 中層水田 (縮尺 1/200)



図26 00202調査（文京遺跡25次）下層水田（縮尺 1/200）



図27 00202調査（文書遺跡25次）水田下の自然溝路（縮尺1/200）

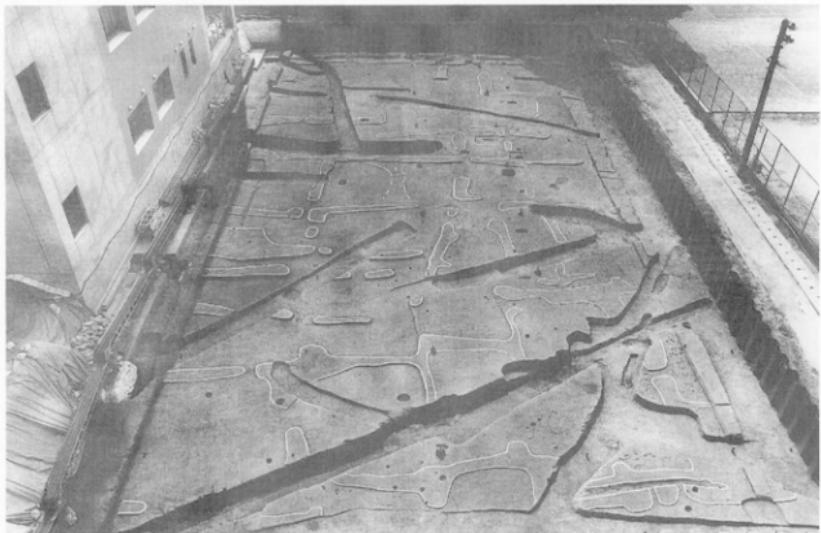


写真85 00202調査（文京遺跡25次）上層水田（東から）



写真86 00202調査（文京遺跡25次）中層水田（東から）

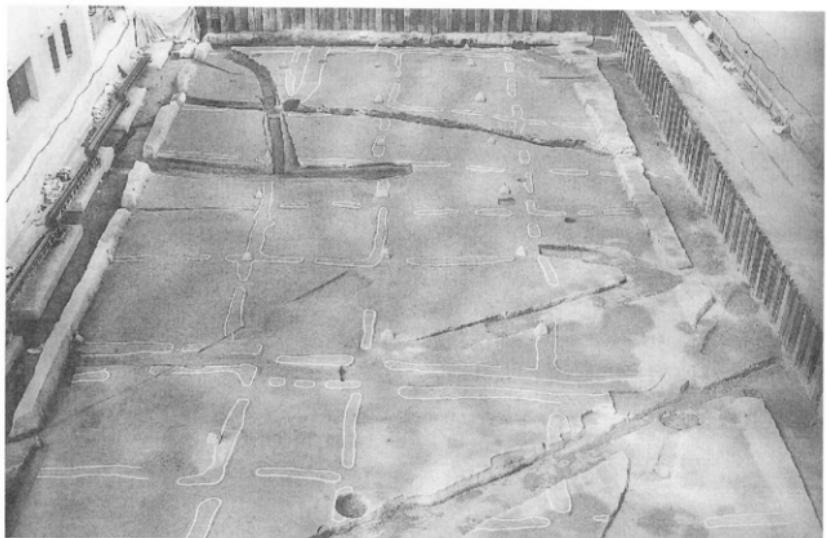


写真87 00202調査（文京遺跡25次）下層水田（東から）



写真88 00202調査（文京遺跡25次）水田下の自然流路（東から）

並ぶとともに、斜行する東西畔や、幅広の畔もあって、水田の並びが一定しない。調査区中央部のDU・DV区で南北方向に並びが整うものの、DW・DX区では、畦畔が明確でない。DW・DX区を除いて、水田1枚は10～25m²と小区画である。

一方、水路はいずれも南北方向のもので、18次調査で見られた、等高線に沿うような東西方向の基幹水路は認められない。また、調査区西端のSD-41は調査区を南北に横断しているものの、SD-5・23は調査区内に留まっている。

② 中層水田（図25、写真86）

12世紀から13世紀初め頃の水田で、調査区全面に水田が営まれる（SS-101～131、SX-132）。ただし、調査区内で中層水田に伴う水路は見出せず、水田面の比高差も10cm程度と小さい。水田はやや斜行するものの、調査区内で南北に5列、東西に9列と整然と連なる。水田南北幅は一部で減じる部分があるが、ほぼ5m前後で一定する。対して、東西幅は5m前後を平均としながら、2.5～7mと差が大きい。水田1枚も9～40m²と小区画ながら、やや格差がある。

③ 下層水田（図26、写真87）

11世紀の水田で、水田の広がりは調査区全域には及ばない（SS-202・203・205・206・208・210・212～234、SX-201・204・207・209、SD-211）。とくに、DS区の南北水路SD-211以東は、耕作土および床土がかなり砂粒を混じえ保水性が低い。それでも畦畔による区画が認められた範囲は水田としたが（SS-202・203・205・206・208・210）、当初水田の広がりを予測していた調査区東端部（SX-201・204・207・209）は、水田耕作土が存在しないとして、水田外とした。

SD-211以西は、北東部で一部保水性の低い箇所が見られるものの、中層水田同様の整った配列を呈する（SS-212～234）。調査区内での比高差は10cm以下。やや斜行するが、調査区内で南北に幅5m前後で一定した4列、東西に幅3～8mとやや差のある6列を確認できる。結果、水田1枚は小区画ながら、15～40m²とやや開きがある。

なお、中層水田検出面の下、下層水田面検出途中で、調査区西寄りで東西方向の水路1条（SD-150）を検出している。先の18次調査でも、中層水田と下層水田の間で遺構を検出しており、明確な面として捉えることができなかつたが、もう1枚の水田遺構が存在したと考えられる。

（2）水田下の自然流路（図27、写真88）

水田遺構の下層は、下層水田を営む条件のシルト質土の堆積が、調査区東部を除いて、平均20cm程度認められた。出土遺物から10世紀後半の堆積とみられる。以下は砂質土あるいは砂・砂礫堆積である。最上層を細かな砂層堆積が覆い、その下は主に砂・砂礫堆積が占め、人頭大の円窓も多く含む。とは言え両者の堆積時間に大きな差はない、ともに最新相の遺物は9世紀初頭を示す。他に、绳文時代中期から、古墳時代中期を除いて、ほぼ連続と遺物を包含するが、8世紀代の遺物が目立ち、布目瓦や赤塗土器類、須恵器円鏡面、さらには奈良二彩などを含むことが特筆される。

このような古代の自然流路は、調査区の大半にわたって、工事掘削深度である地表下300cmまで続き、自然流路の底までは完掘していない。IV層と認められる堆積は、調査区東北部で、南に傾斜するIV層上面を東北東～西南西に延びる低平な尾根縦状に確認している。そして、調査区中央部で屈曲して東南東～西北西に転じ、DW区辺りで北壁に消えていく。他方、調査区南東隅部でもIV層の高まりが認められる。また、調査区南西部では、人頭大の川原石の堆積が、北側に傾斜をもった高まりを形成する。その直上には、ブロック状のⅢ層とIV層が堆積し、しまりもやや強い面をなす。

以上の状況から、古代において自然流路が、東北東から西南西方向に調査区内に流入し、調査区中央で屈曲して、東南東から西北西方向へと流れを転じていたと復元することができる。

3 調査のまとめ

今回の調査では、旧石手川扇状地上を走る網の目状の自然流路が埋没し、水田として利用されていく様を具体的に復元できる成果を得た。

まず、調査範囲内の大部分は、地表下300cmでもまだ9世紀初頭の河川堆積が続き、それ以前はさらに深い谷を形成していたことが窺える。したがって、南側の微高地に弥生時代の大集落が営まれた頃は、比高差2～3mに及ぶ谷であり、しかも上層の砂・砂礫堆積からして、水流も安定していないような状態であったことが推測される。すると、このような調査所見による限り、大規模な弥生時代集落の食料を貯えるだけの開田を、この谷部に求めることはできない。

河川の水流が安定し、水田の床土となり得るシルト質土が堆積するのは、ようやく10世紀後半頃である。

以降、11世紀から13世紀にかけて3枚の小区画水田が営まれていく。これらは、先の18次調査で確認された3枚の水田に相当するが、今回の調査区内では、いずれの水田面も比高差は小さく、東西方向の等高線に平行するような水路も見られない。したがって、今回の調査地点は、水田が営まれた頃は谷状の凹地内でも、

南側微高地から一段落ち切った、比較的平坦なところに位置していたものと考えられる。ただし、北側の文京遺跡22次調査（調査番号：00005）での所見からは、今回の調査地点が谷底平坦面となるのではなく、さらにもう一段深い窪地が北側には控えていることが窺える。

（吉田・三吉）

00203 (城北) 情報教育棟用地理文化財調査に伴う 土木工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番
愛媛大学城北団地（図1）
調査期間 2002年5月15・17日
調査の種別 立会調査
調査担当 吉田広・三吉秀充
依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
(平成14年5月14日付)

1 調査にいたる経緯

文京遺跡25次調査（調査番号：00202）に先行して、シートバイル打ち込み作業を、南辺以外の調査区周囲に行うこととなった。ところが、調査区北辺には、ほぼこれに平行して既設雨水排水管路があり、この管路の正確な位置を特定して、作業を進める必要が急迫生じた。既設管路の再掘削ではあるが、2mを超える深度でもあるため、埋蔵文化財調査室では、掘削に際し

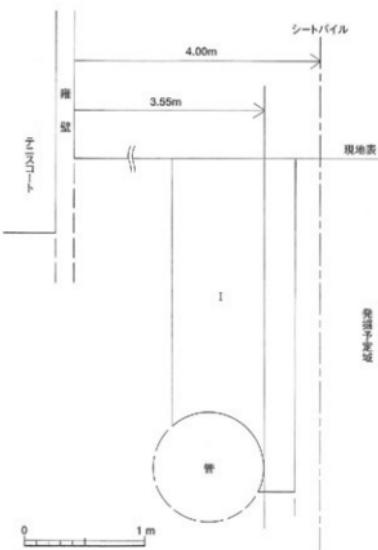


図28 00203調査土層柱状模式図（縮尺 1/40）

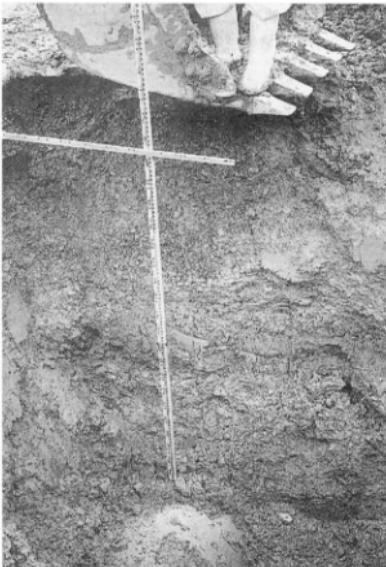


写真89 00203調査地点東壁土層（西から）

て立会調査を実施することとした。

2 調査の記録（図28、写真89）

25次調査の調査区に基づき、その北西隅部に位置する井に連なる管路を、発掘調査区北東隅部で確認する掘削を行うこととなった。

結果、調査地点においては、北側テニスコート擁壁から3.55mの地点で既設管路の南端を検出し、管上端

の深度は現地表下205cmであることが判明した。

3 調査後の対応

シートパイル打ち込み位置は、テニスコートの擁壁から4m南になり、打ち込みに要する余掘り幅を勘案しても、既設管路に影響ないと判断できたため、以後のシートパイル打ち込み作業に対して慎重工事を依頼して、調査を終えた。
(吉田)

00204（城北）総合研究棟等改修工事に伴う調査 (文京遺跡26次調査)

調査地点 松山市文京町3番

愛媛大学城北団地（図1）

調査面積 144.7m²

調査期間 2002年7月19日～8月9日

調査種別 本格調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄

依頼文書 施設部施設課長発事務連絡

（平成14年4月25日付）

1 調査にいたる経緯

工学部の一部移転に伴って、旧工学部本館を総合研究棟とする改修工事が行われることとなった。旧工学部本館は、昭和38～40年の建設時に、弥生時代後期を主体とする遺物が採集され、附属図書館2階ホールに出土遺物が展示されている。また、南側の地域共同研究センターやベンチャー・ビジネス・ラボラトリービル建設に伴う文京遺跡13・20次調査（調査番号：99506・99910）など、周辺では弥生時代～中世の遺構と遺物が出土している。

改修工事にあたっては、電気・通信・排水の管路の敷設計画がたてられており、埋蔵文化財への影響ができるだけ少なくなるように、施設部との協議を重ねた。しかし、一部の管路や橋部分では、掘削深度を浅く調整できず、これらを文京遺跡26次調査（調査番号：00204）として、全面調査することとした。

2 調査の概要

今回の調査では、旧工学部本館建物へ電気・通信・排水管を引き込むため、調査地点は建物北側で4箇所、

南側で2箇所と点在する。そこで、I～VI区の調査区を設定し、城北団地全域で日本測地系平面直角座標系IV系を利用して設けた5m方眼の区割によって調査を進めることとした（図29）。

表7 00204調査（文京遺跡26次）遺構一覧

地区	遺構の種別・数量	
I区	堅穴式住居 掘立柱建物 土壙 炉 柱穴・小穴	1 (SC-2) 1 (SB-11) 3 (SK-1・4・27) 1 (SF-22) 22 (SP-3・7・8~10・12~16・18~21・23~26) (28・29・31・33)
II区	堅穴式住居 土壙 溝 柱穴・小穴	1 (SC-50) 3 (SK-41・44・45) 3 (SD-53~55) 8 (SP-42・43・46~49・51・52)
III区	土壙 柱穴・小穴	1 (SK-61) 3 (SP-62~64)
IV区	遺構	出土していない。
V区	堅穴式住居 土壙 溝 柱穴・小穴	1 (SC-89) 7 (SK-74・78・79・91・92・95・97) 1 (SD-71) 20 (SP-72・73・75~77・80~88・90・93・94) (96・98・99)
VI区	土壙 柱穴・小穴	1 (SK-106) 6 (SP-101~105・107)

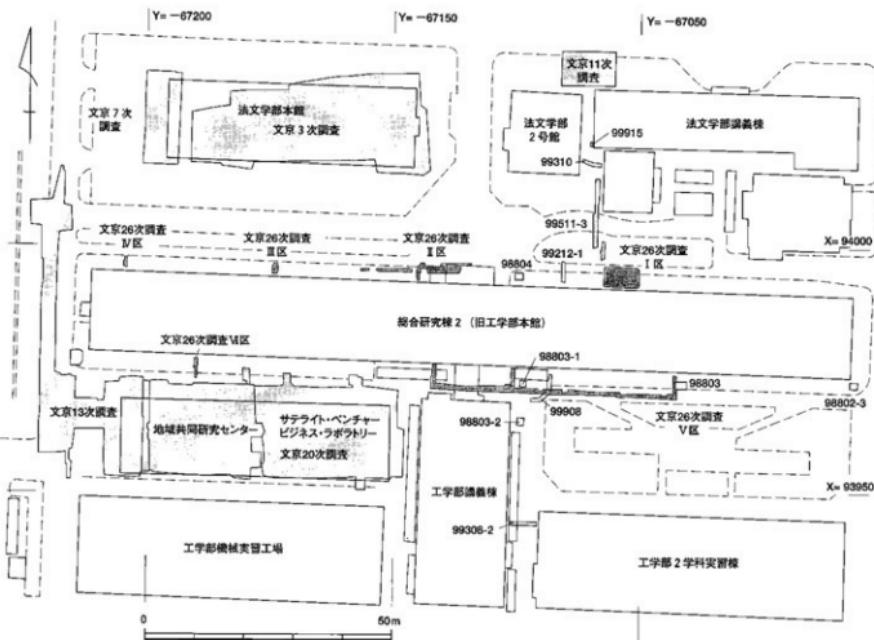


図29 00204調査（文京遺跡26次）調査位置図（縮尺 1/1,000）

I 区：旧工学部本館建物北側の東よりの共同溝から
管路を引き込む部分で、CI・CJ-19・20区に
位置する。

II区：建物北側のほぼ中央の管路部分で、CO～CT-19・20区に位置する。

III区：建物北側の西よりの管路部分で、CW-19・
20区に位置する。

IV区：建物北西部の管路部分で、DC-19・20に位置する。

V区：建物南東側に計画された管路部分で、CG～CG-14～16区に位置する。

VI区：建物南西部で引き込まれる管路部分で、
CZ・DA-15・16区に位置する

今回のいずれの調査地点でも、城北団地基本層序の

I～V層の関係を確認できた。しかし、個々で基本層序を構成する土層群の特性は異なるため、調査区ごとに、その詳細を記すこととした。なお、今回の調査で出土した遺構の埋土を観察すると、以下のa～cに分類できる。

a : やや灰色みを帯びる暗褐色土の埋土。

b : 砂礫や小礫が混じる黒褐色の砂質シルトもしくは砂質土の埋土。

c：黒褐色の砂質シルトもしくは砂質土であるが、
b と比べて、砂礫や小礫はほとんど混じらず、
場合によっては部分的に粘性を帯びるシルトの
埋土。

文京遺跡13次調査に代表される周辺の調査成果から、aは中世、bは古墳時代後期、cは弥生時代～古

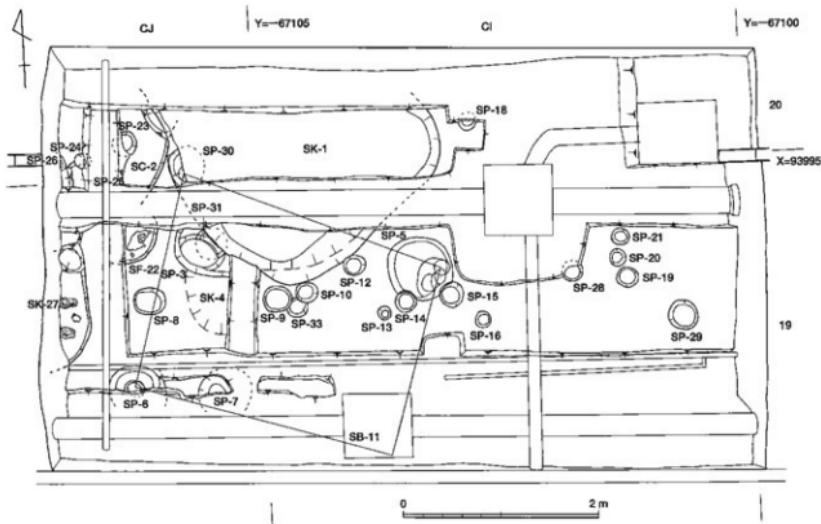


図30 00204調査（文京遺跡26次）I区全体図（縮尺 1/50）

墳時代中期の遺構と考えられる。また、cの埋土をもつ遺構は、出土遺物から弥生時代中期後葉～後期である可能性が高い。

今回の調査では、調査範囲が狭く、既設の管路などによる攪乱が著しいが、比較的多くの遺構が出土した。I区では1~33、II区では41~52、III区では61~64、V区では71~99、VI区では101~107の遺構番号を与え、これに遺構略号を冠して種別を示した。ただし、I区17・30・32号遺構は、遺構検出時にIV層上面に染み込んだIII層部分を誤認したもので、欠番とした（表7）。

（1）I区の遺構・遺物（図30、写真90~96）

I区では、地表下50cmでII層、65~70cmでIII層があらわれた。II層にはぶい黄褐色砂質土で、径3~5mmの小礫が多く混じる。下部ほどきめが細かくなる。III層は、共同溝の余掘部分と建物に沿って埋設されている管路の間、約3mの幅に残存し、15cm前後の厚さで、径1~3mmの小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトである。下部ほど墨みが強い。このIII層を掘り下げ中に比較的多くの遺物が出土した（写真92・93）。

III層下のIV層上面で多くの遺構を検出した。遺構に

は、SC-2・SB-11、SK-1・4・27、SF-22、SP-3・7・8・10・12・16・18~21・23~26・28・29・31・33がある（図30、写真90・91）。とくに、I区西半部で、竪穴式住居や掘立柱建物、土壤が密集して出土した。これらの中で、SP-23・24は、やや灰色みを帯びるa類型の埋土をもち、中世の遺構である可能性が高い。以外の遺構は、いずれもc類型の埋土をもち、さらに出土遺物から、弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。

この中で、SC-2は、CJ-19・20区に位置する竪穴式住居である。調査区が狭く、攪乱で破壊された部分も多いが、IV層上面で、SK-1に切られる深さ5cmほどの黒褐色シルトの広がりを確認した。底面から壁が比較的立ち上がることから、竪穴式住居の一部と考えた。SP-25・26を床面で確認したが、柱穴か否かは判然としない。

また、SB-11は、SP-5・6・30から構成される1間×1間の掘立柱建物である。それぞれ柱痕跡を検出した。桁行の柱痕跡間2.77m、梁間の柱痕跡間2.2mを測る。

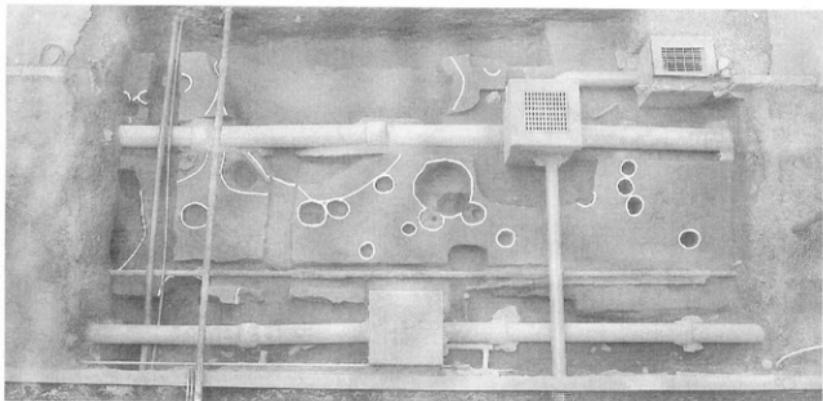


写真90 00204調査（文京遺跡26次）I区完掘全景（南から）

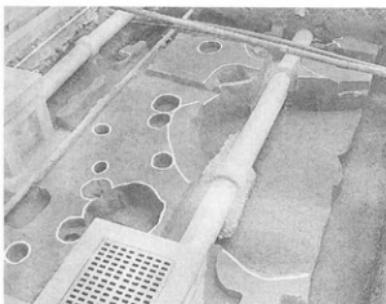


写真91 00204調査（文京遺跡26次）I区完掘
(東から)

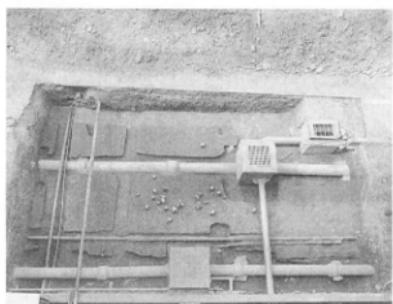


写真92 00204調査（文京遺跡26次）I区
III層除去後全景（南から）



写真93 00204調査（文京遺跡26次）I区
III層中遺物出土状況（西から）



写真94 00204調査（文京遺跡26次）I区
SK-27炭化板材出土状況（南東から）



写真95 00204調査（文京遺跡26次）I区
SF-22検出状況（西から）



写真96 00204調査（文京遺跡26次）I区
SF-22発掘（西から）



写真97 00204調査（文京遺跡26次）II区
全景（東から）



写真98 00204調査（文京遺跡26次）II区
東端発掘（西から）

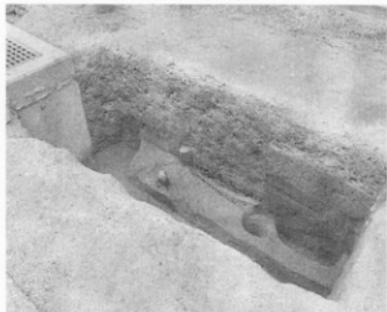
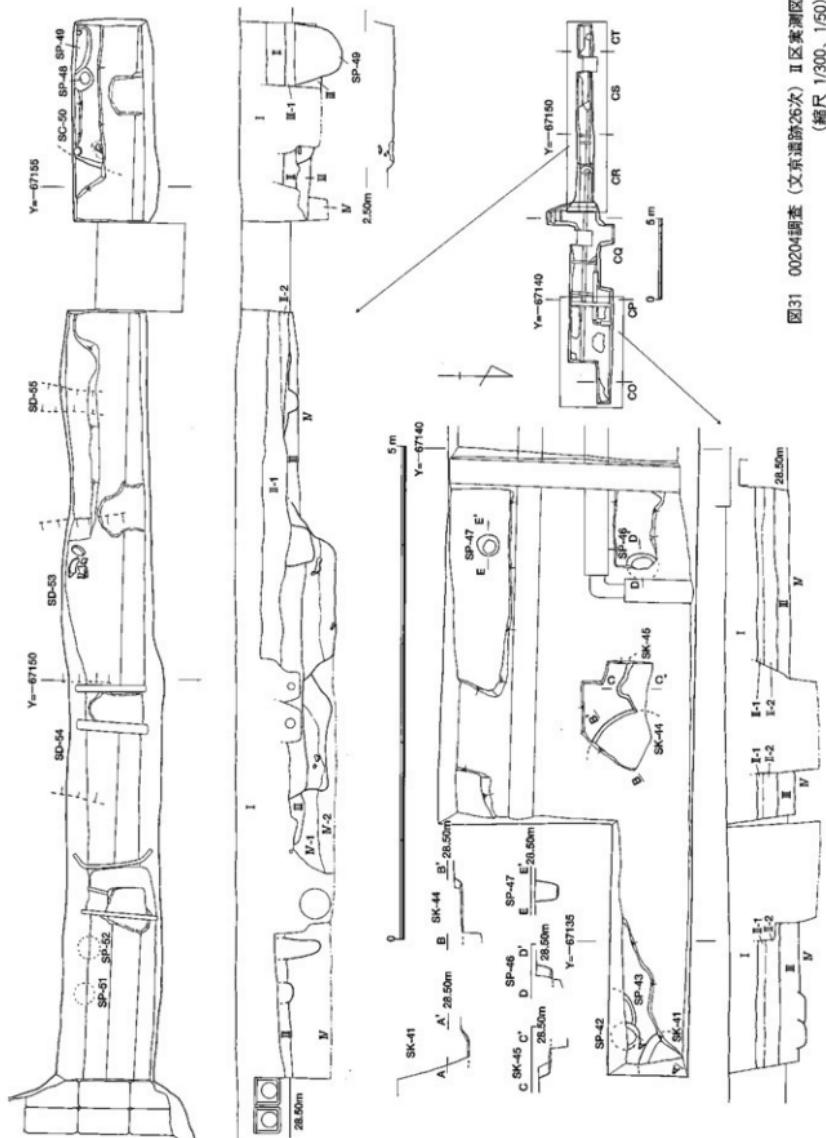


写真99 00204調査（文京遺跡26次）II区
SC-50（北西から）



写真100 00204調査（文京遺跡26次）II区
SD-53・54土層（北東から）



土壌の中で、SK-1は、短径2.5mほどの隅丸長方形の土壌である（写真91）。文京遺跡12次調査でも、同様な規模と形態の土壌がある。底面は平らで完形に復元できる甕や壺がまとまって出土していることから、貯蔵穴と考えられる。埋土は、上層から床面近くまで、親指先～5cm大の黄褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる暗褐色シルトで、埋め戻している可能性が高い。また、調査区西壁際で検出したSK-27では、床面近くから、幅10cm、厚さ1cm前後の炭化板材が2枚並んだ状態で出土した（写真94）。

さらに、SF-22は、南東部の1/4ほどしか残存していないが、径70～80cmの円形の土壌を復元でき、底面に接するように、厚さ5cmほどの焼土がかたまって出土した（写真95・96）。炉跡と考えられるが、野外炉なのか、竪穴式住居に伴う炉なのかは、調査範囲が狭く判然としない。

（2）Ⅱ区の遺構・遺物（図31、写真97～100）

Ⅱ区の調査では、中央部西よりのCQ-19・20区が攪乱すべてを破壊されており、東半部のCO・CP-19・20区と、中央部から西側のCR～CT-19・20区に分けて調査を進めた（図31、写真97）。

Ⅱ区東半部のCO・CP-19・20区では、地表下25～30cmでⅡ層、50cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は、上部の灰黄褐色砂質土層であるⅡ-1層と、下部の黄褐色砂質土層であるⅡ-2層に分層できる。Ⅱ-1層は团地造成以前の水田耕作土層、Ⅱ-2層は床土層である。Ⅲ層は黒褐色砂質土で、褐色みを帯びる。後述するⅣ区のⅢ-1層とほぼ共通する土層である。地表下65～70cm以下にはにぶい黄褐色砂質土のⅣ層である（写真98）。

Ⅱ区中央部から西側のCR～CT-19・20区では、地表下25～43cmでⅡ層、50～55cmでⅢ層を検出した。Ⅱ層は、CO～CP-19・20区と同じく、上部の水田耕作土である砂礫混じりの灰黄褐色砂質土層のⅡ-1層と、下部のにぶい黄褐色砂質土Ⅱ-2層に分層できる。Ⅱ-1層からは土器片が出土。Ⅱ-2層の下面には粗砂が薄く堆積する。Ⅲ層は黒褐色砂質土で、きめが細かい。地表下55～65cm以下は、にぶい黄褐色砂質土のⅣ層である。深く掘り込まれた攪乱壁面で観察すると、Ⅳ層の下部は、灰黄褐色粗砂に変化する。

調査区内の攪乱が著しいものの、SC-50、SK-41・44・45、SD-53～55、SP-42・43・46～49・51・52の比較的多くの遺構が出土した。この中で、SD-53～55

の3条の溝は、a類型の埋土をもつことと出土遺物から、中世の溝と考えられる。また、SP-51・52は、埋土に砂礫が多く混じるb類型の埋土をもち、古墳後期の遺構である可能性が高い。以外の遺構は、c類型の埋土をもつが、SP-48は切り合い関係と埋土の特徴から古墳前期～中期。他はいずれも弥生時代、とくに中期後葉～後期前葉の遺構であると考えられる。

その中で、SC-50は、Ⅱ区西端のCT-20区で出土した竪穴式住居である。Ⅲ層上面から掘り込まれ、15～20cmの周壁の立ち上がりを確認できたが、平面形は不明である。底面がほぼ平坦であることから、竪穴式住居と判断した。埋土は黒褐色砂質土で、埋土中と床面から弥生土器片が出土した。また、床面に貼り付いた状態で焼土塊が出土した（写真99）。

また、SD-53は、Ⅱ区西半部のCR・CS-20区に位置する溝で、Ⅲ層上部から掘り込まれ、SD-54を切る。溝幅は、調査区南壁で3.05mを測る。西側が断面逆台形に深く30cmほど掘り込まれる。西側の断面逆台形部分の下層には、径3～5mmの砂礫が多く混じる黒褐色砂質土が堆積し、粘性を帯びた部分が縞状に観察できる。その上位にはきめが細かい黒褐色砂質シルトが堆積し、さらに溝全面を覆う最上層には砂礫混じりの黒褐色砂質土が流れ込む。これに切られたSD-54は、幅1.2mの断面逆台形を呈する。埋土上部は灰黄褐色粗砂層、下部はにぶい黄褐色細砂層が堆積する。埋土上部から古代～中世の遺物が出土した（写真100）。SD-55は、Ⅲ層を切り込む幅90cmほどの溝で、中央部には幅25cm、深さ10cmの小溝状の窪みが見られる。その中には、薄いレンズ状の粗砂層や細砂層が縞状に互層堆積する。

（3）Ⅲ区の遺構・遺物（図32上右、写真101）

Ⅲ区の南北両端は、既設の管路で攪乱を受け破壊されていたが、中央部では地表下45cmでⅡ層、80cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は灰色みを帯びた黄褐色砂質土層で、上部のⅡ-1層と、下部のⅡ-2層に分層できる。Ⅱ-1層は、灰黄褐色砂質土で、径5～10mmの砂礫が多く混じる。径5mmの細長い炭化物を少量含む。Ⅱ-2層は、下部を中心として灰色みを帯びたにぶい黄褐色砂質土層。径2～3mmの砂礫が多く混じる。Ⅲ層は、黒褐色砂質土で、上部は遺構埋土と共通してやや粘性があり、下部はきめが細かくサラサラした土質で黄色みが強くなる。上部から下部への変化は漸移的である。地表下120cm以下はⅣ層である。

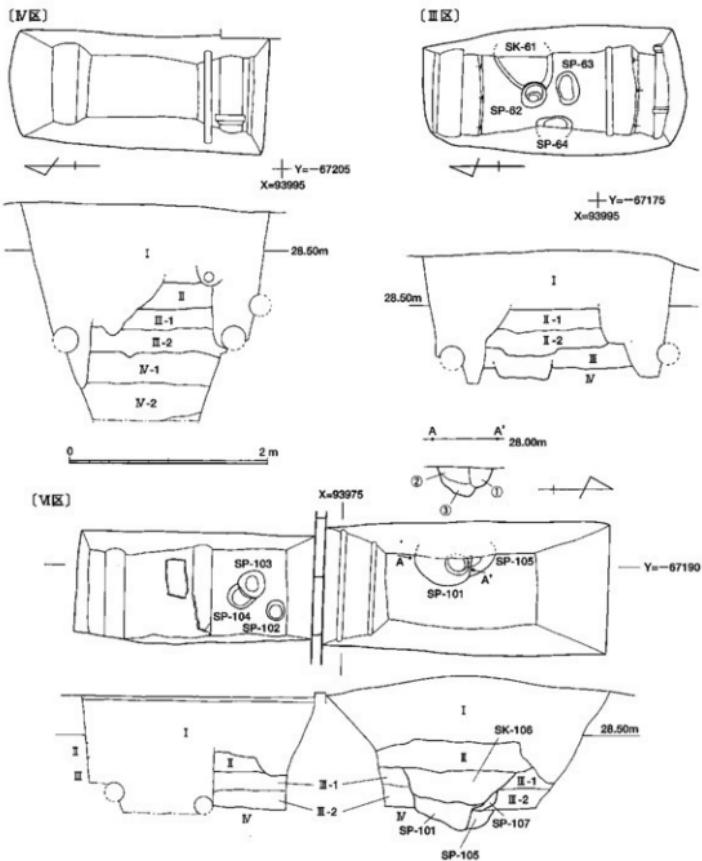


図32 00204調査（文京遺跡26次）Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区実測図（縮尺 1/50）

IV層上面で、SK-61、SP-62～64を検出した。調査区壁面の観察で、SK-61とSP-64はⅢ層中位から掘り込まれていることを確認できた。いずれもc類型の埋土をもち、弥生時代中期後葉～古墳時代前期の遺構である。

(4) IV区の遺構・遺物（図32上左、写真102）

地表下80cmでII層、105cmでIII層があらわされた。II層は、暗オリーブ褐色砂質土で、下部は褐色みを帯び

てくる。III層は、40～45cmの厚さで、上部のIII-1層と、下部のIII-2層に分層できる。III-1層は、暗褐色に近い黒褐色砂質シルトで、部分的に粘性を帯びる。径2～3mmの砂礫が混じる。土器片が出土。III-2層は、黒褐色粘土で、粘性が強い。地表下150cmでIV層があらわされた。上層からIV-1～IV-3層に分層できる。IV-1層は、にぶい黄褐色シルトで、部分的に粘性を帯びる。IV-2層も、同じにぶい黄褐色シルトで



写真101 00204調査（文京遺跡26次）Ⅲ区
完掘状況（北から）



写真102 00204調査（文京遺跡26次）Ⅳ区
Ⅲ層検出状況（北から）



写真103 00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区
東半部完掘（西から）

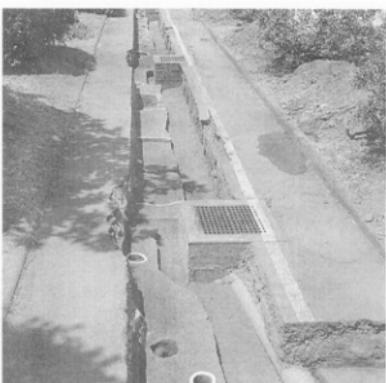


写真104 00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区
東端部完掘（東から）

あるが、IV-1層より灰色みを帯びる。IV-3層は、灰黄褐色細砂層である。

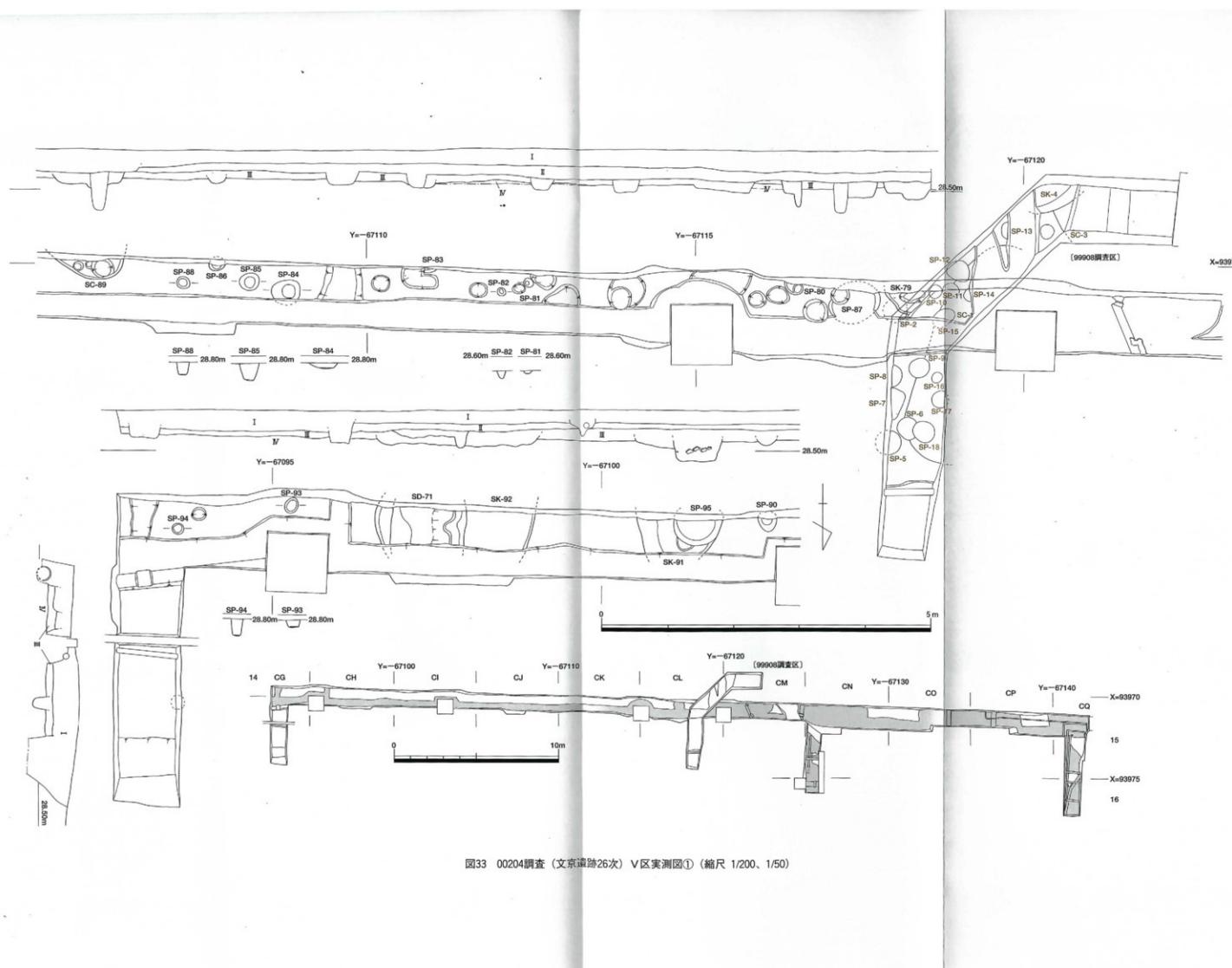
IV区では、遺構は出土していない。遺物は、Ⅲ層中から弥生土器片が数点出土しているのみである。

（5）V区の調査（図33・34、写真103～105）

V区は、CG～CQ-14～16区の旧工学部本館建物の南東側に計画された総延長62mほどの管路部分であ

る。既往の99908調査区と一部重複する。また、CM～CO-15区は既設の管路や井の設置に伴う擾乱が著しく、遺構はすべて破壊されていた。そのため、調査は、東半部のCG～CL-14・15区と、西端部のCP・CQ-15・16区に分けて進めることとした。

V区東半部のCG～CL-14・15区では、地表下20～25cmでⅡ層が、30～35cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は灰



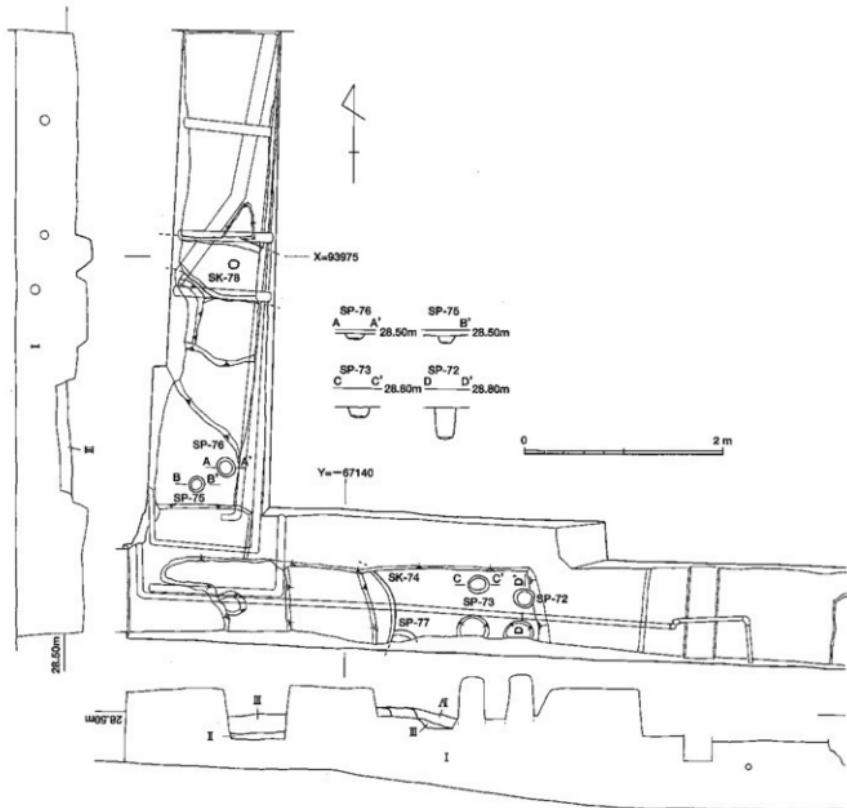


図34 00204調査（文京遺跡26次）V区実測図②（縮尺 1/50）

黄褐色砂質土、Ⅲ層は黒褐色砂質シルトである。ただし、この地点のⅢ層は、他地点と比べてやや明るい土色で、砂礫が比較的多く混じる。また、Ⅲ層は厚さ10cm前後と薄く、地表下40~45cmでⅣ層があらわれた（図33、写真103・104）。その西側のCO・CN-15区では、Ⅲ層下にはⅣ層は見られず、暗褐色砂質土や灰色砂礫層、黄褐色細砂層のV層と考えられる土層群が盛り上がる。

V区西端部のCP・CQ-15・16区では、既設管路の設置時にかなりの擾乱を受けており、II層は残存せず、Ⅲ層も地表下40~45cmで部分的に確認されたにすぎな

い。この地点のⅢ層は、黒褐色砂質シルトで、上部に砂礫が多く混じるのに対して、下部にはほとんど砂礫は混じらない。地表下55~60cmでⅣ層上面を検出した（図34、写真105）。

V区では、擾乱が著しいものの、SC-89、SK-74・78・79・91・92・95・97、SD-71、SP-72・73・75・77・80~88・90・93・94・96・98・99の遺構が出土した。この中で、SD-71、SK-92、SP-84・85・88・93・94は、灰色みを帯びたa類型の埋土をもち、中世の遺構と考えられる。また、埋土に小縫が混じるb類型の埋土のSK-78・91・95・97、SP-72・73・75・



写真105 00204調査（文京遺跡26次）VI区
西端部完掘（北から）



写真106 00204調査（文京遺跡26次）VI区
遺構検出状況（北から）

77・80～83は古墳時代後期、小標がほとんど混じらないc類型の埋土をもつSC-89、SK-74・79、SP-76・86・87・90・96は、弥生時代とくに中期後葉～後期の可能性が高い。

（6） VI区の調査（図32下、写真106）

地表下55～65cmでII層、75～95cmでIII層があらわれた。II層は砂礫混じりの灰褐色砂質土。III層は、上部の砂礫混じりの暗褐色砂質シルトであるIII-1層と、下部の黒褐色シルトのIII-2層に分層できる。III-1層は明るい茶色系の土色で、砂礫を多く含む点がIII-2層と異なる。III層は37～40cmの厚さで、地表下110～125cmでIV層の上面を確認した。

IV層の上面でSP-101～105、DA-16区壁面でSK-106とSP-107を確認した。これらは、いずれも砂礫混じりのb類型の埋土をもつ。古墳時代後期と考えてよい。

3 調査のまとめ

今回の調査は、調査範囲が狭い上に、擾乱が著しかったが、多くの遺構を確認できた。前述した昭和38～40年の旧工業部本館建設時に出土した弥生時代後期を主体とする遺物だけではなく、弥生時代から中世の遺構が周辺に濃密に分布することが考えられる。とくに、I区では、弥生時代中期後葉～後期前葉の遺構が密集して出土し、当該期の文京遺跡の大規模集落がこれまで考えられてきた以上に東側に延びることを確認できたのは大きな調査成果と言える。

また、特徴ある遺物として、II区CT-20区SC-50の

壁際から、線刻絵画土器が出土している。壺の肩部と考えられる破片で、細いヘラ状工具で描かれる。弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられるが、これまで文京遺跡で出土している、鹿を描いた線刻絵画土器とは異なる抽象的な表現をとるものである（図35-1）。また、I区CI-19区では、III層中から分銅形土製品が1点出土している（図35-2）。

（田崎）

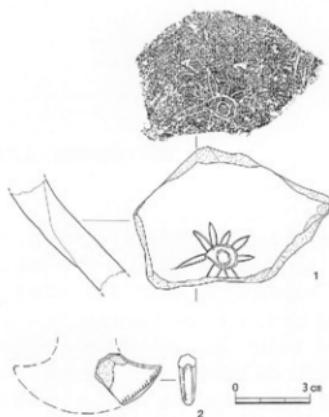


図35 00204調査（文京遺跡26次）出土遺物実測図（縮尺1/2）

00205（城北）総合研究棟等改修電気設備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番
 愛媛大学城北団地（図1）
 調査面積 3 m²
 調査期間 2002年10月21日
 調査の種別 立会調査
 調査担当 田崎博之
 調査補助 宮崎直栄
 依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
 （平成14年10月16日付）

1 調査にいたる経緯

旧工学部本館である総合研究棟改修に伴い、新たな電線管が城北団地西門付近で構内に引き込まれることになった。埋蔵文化財調査室と施設部の協議で、既設管路を用いることとされていたが、工学部4号館西側の駐輪場では、配管の都合で既設管路外を掘削する必要が生じたことが、施設部から埋蔵文化財調査室に連絡された。埋蔵文化財調査室では、既往の調査成果から、当初設計の掘削深度では埋蔵文化財に影響があると判断し、施設部と協議の上、掘削深度を浅くするとともに、工事にあたって立会調査を行うこととした。

2 調査の記録（図36）

今回の調査地点は、工学部4号館西側の駐輪場のはば中央部にある。駐輪場は、工学部4号館建設後に設けられ、40~70cmの盛土が行われている。駐輪場の南西側の99215調査2トレンチでは道路面から55cmで、北側の16A次調査区（調査番号：99701）南西端では表土から40cmで、城北団地基本層序のⅢ層に達する。これらから、工事地点では現舗装面から100~105cmでⅢ層があらわれる可能性が高い。

電線管路掘削では、地表下80cmまでⅠ層が続き、その下位にはⅡ層が見られる。そして、地表下105cmでⅢ層があらわれた。Ⅲ層最上部は砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、土器の繊片が点々と出土した。砂礫の多く混じる最上部は約5cm続き、黒褐色砂質シルトに漸移的に変化する。こうしたⅢ層の堆積状況は、駐輪場の南西側の99215・99404調査地点とは異なり、北側の16A次調査区南西端と共通する。

3 調査後の対応

既設管路外の掘削深度を、Ⅲ層があらわれた地表下105cmまでに依頼し、調査を終了した。（田崎）

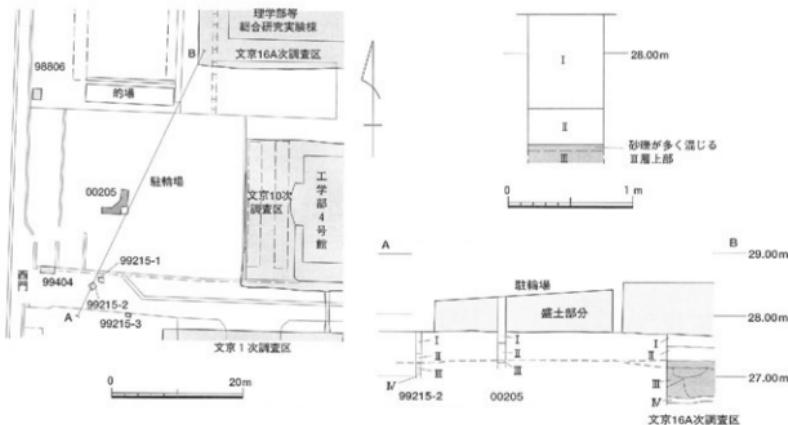


図36 00205調査地点位置図、土層柱状図および周辺土層断面図（縮尺 1/750、1/40、1/750・1/80）

00206 (城北)情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営
その他工事(その2)に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番
 愛媛大学城北団地(図1)
 調査面積 0.5m²
 調査期間 2002年11月27日
 調査の種別 試掘調査
 調査担当 田崎博之
 調査補助 宮崎直栄
 依頼文書 施設部設課長発事務連絡
 (平成14年11月27日付)

1 調査にいたる経緯

情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新館に伴って、総合情報処理センターの西側の囲障を取り壊し、新たに通用門を設置することになった。工事地点は、1998年に決定された遺跡保存範囲と隣接することから、周辺における既往の調査成果によって、施設部から提示された計画案を検討した。その結果、ごくわずかであるが、遺跡保存範囲で、城北団地基本層序のⅢ層に掘削の及ぶ可能性が生じた。そのため、試掘調査を行い、その結果を踏まえた上で、施設部と埋蔵文化

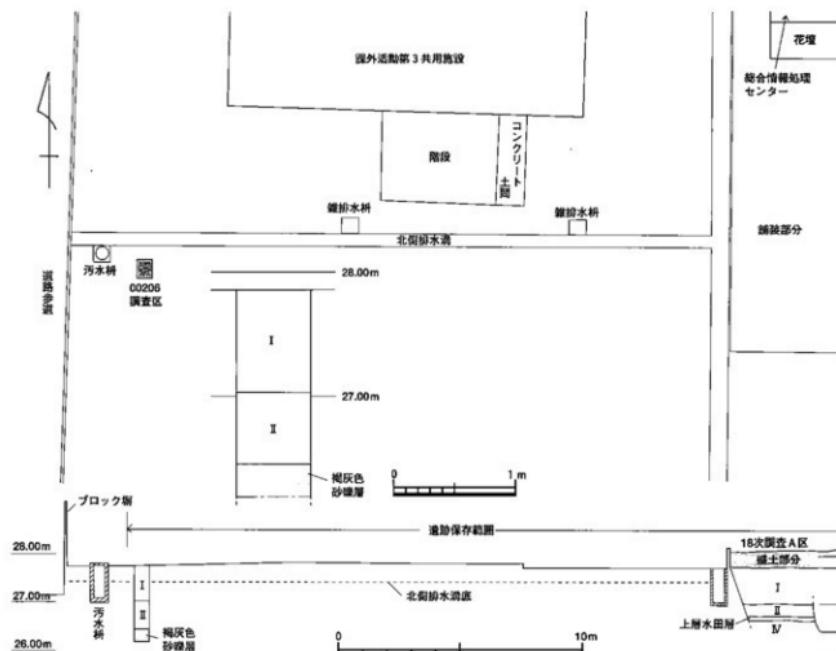


図37 00206調査地点位置図、土壠柱状図および周辺土壠断面図（縮尺 1/200、1/40、1/200：1/100）

財調査室が協議し、遺跡保存範囲の埋蔵文化財に影響が生じないように、設計を変更することとなった。

2 調査の記録（図37、写真107～109）

工事計画地点は、城北団地西辺のほぼ中央にある。既存の污水管路や電線管路をさけて、囲障から3mほど離れた地点に調査地点を設定した（写真107・108）。

表土下80cmまで造成土であるⅠ層が続き、その下層には砂礫混じりの黄灰色砂質シルトが見られる。炭化物片が多く混じり、薄いマンガンの沈着層が何重にも縦状に観察できる。団地造成以前の旧水田層であるⅡ層である。Ⅱ層下からは、地表下140cmで褐色砂礫層があらわれた。層厚を確認するために、現地表下165cmまで掘り下げたが、なお砂礫層が続く（写真109）。遺物は出土していない。こうしたⅡ層下の褐色砂礫層は、北東側に25mほど離れた18次調査（調査番号：99802）A区ではみられない。むしろ、南側に50mほど離れた17次調査（調査番号：99715）3トレンチで確認されている、弥生時代後期後半の土器を包含するSR-50の埋土である砂礫層に共通する。

3 調査のまとめと対応

今回の調査では、Ⅱ層下で確認した褐色砂礫層は、南側の17次調査3トレンチで確認されている弥生時代後期後半に埋没するSR-50の埋土である砂礫層と対応する。SR-50が団地西辺に沿ってほぼ南北に流れていたことが考えられる。

以上の調査結果をまとめ、施設部と協議を行った。その結果、

- ① 通用門の新設にあたっての掘削を、団地西側の歩道面から30cmに留めること。
- ② 外灯工事では、外灯基礎部分では地表下80cm、管路部分では30cmの掘削に留めること。
- ③ 付け替えが必要となる污水管路は、既設の管路よりも深くしないこと。

の、遺跡保存範囲の埋蔵文化財に影響がない設計変更を行うこととした。

また、施設部においては、工事の発注時に、施工業者に埋蔵文化財に影響が生じないよう、慎重工事が必要なことを周知徹底する旨、依頼した。（田崎）

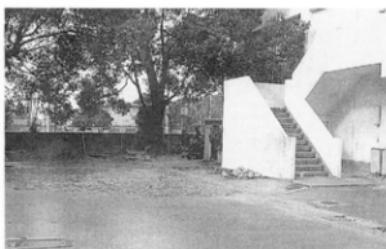


写真107 00206調査地点遠景（東から）



写真108 00206調査地点（東から）

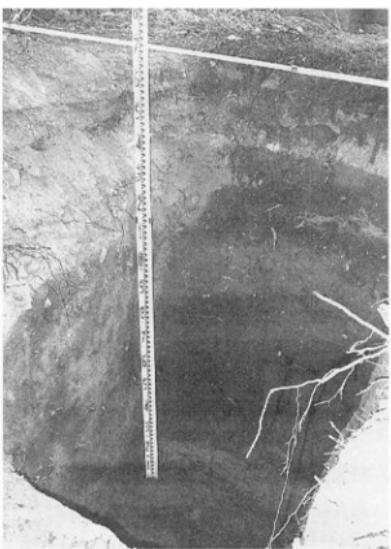


写真109 00206調査西壁土層（北東から）

00207 (城北) 総合研究棟新営電気設備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町2番5号
愛媛大学城北団地理学部構内 (図1)
調査面積 1.5m²
調査期間 2002年11月29日
調査の種別 立会調査
調査担当 田崎博之
調査補助 宮崎直栄
依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
(平成14年4月30日付)

1 調査にいたる経緯

理学部構内に建設されている総合研究棟への電気引き込み工事が行われることとなり、先の文京遺跡21・24次調査（調査番号：00003・00105）の成果から、埋蔵文化財へ影響が及ぶことは確実であり、立会調査を実施することとなった。

2 調査の記録 (図38、写真110・111)

調査地点は、理学部構内の南東隅に位置する（写真110）。西側の、文京遺跡21次調査I区南東部では、東西に延びる古代～中世の溝であるSD-5を確認していたが、その延長部分を、城北団地基本層序のIV層上面で確認できた（写真111）。ただし、遺物は出土していない。

3 調査後の対応

文京遺跡21・24次調査では、IV層上半部には縄文後期、下半部には縄文前期の遺構と遺物が含まれていることが明らかにされている。今回の工事では、周辺が盛土されており、縄文後期の遺構と遺物が含まれるIV層上半部まで掘削が及ばないため、慎重工事を依頼し、IV層上面まで調査を終了した。（田崎）

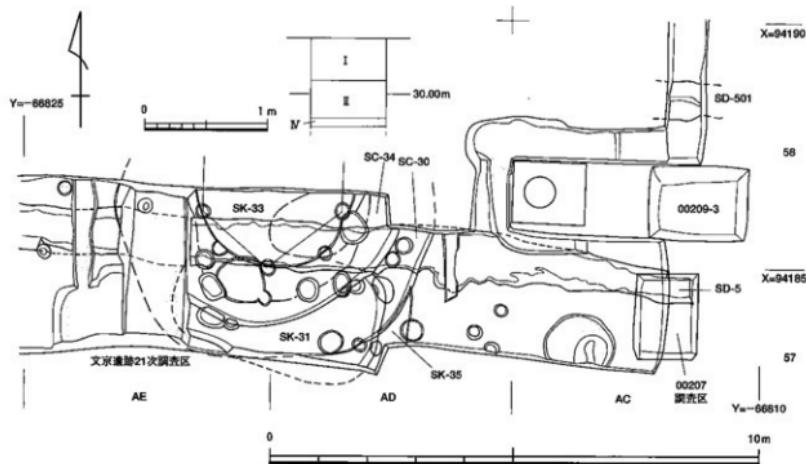


図38 00207調査地点位置図および土層柱状図（縮尺 1/100、1/40）



写真110 00207調査地点（西から）



写真111 00207調査遺構検出状況（北から）

00208 2002年度構内遺跡確認調査

調査地点 松山市山越4丁目11番10号
 愛媛大学山越圃地（図3）
 調査面積 65m²
 調査期間 2002年12月25・26日
 調査の種別 確認調査
 調査担当 田崎博之
 調査補助 宮崎直栄
 依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
 （平成14年11月19日付）

1 調査にいたる経緯

施設部から、山越圃地ラグビー場の防球ネット取設工事について、埋蔵文化財調査の要否及び実施の依頼があった。しかし、山越圃地では点的な調査しか行われておらず、工事に対して正確な情報を回答することができない状態にあった。そこで、2002年度の構内遺跡確認調査を山越圃地で実施することにより、圃地内の埋蔵文化財の分布状況を把握することとした。

2 調査の記録（図39）

調査地点は、ラグビー場防球ネット取設工事が計画されている圃地東辺に沿って南北に1～6トレンチ、北辺東側に7・8トレンチを設定し（写真112・119）、遺構の有無や堆積物の観察を行った。各トレンチの堆積土層の対応関係は複雑で、以下のように大別を行い、トレンチごとに堆積土層の特徴を報告する。

- ①層：表土層。
- ②層：圃地造成以前の旧水田層。
- ③層：圃地東辺の1～4トレンチで確認できた河川堆積物および湿地堆積物。
- ④層：圃地北東隅近くの7・8トレンチで確認できた湿地堆積物。
- ⑤層：2・4・7・8トレンチで、③・④層下で確認できた河川堆積物。
- ⑥層：圃地北東隅の5・6トレンチで確認できた黒褐色砂質シルト層。
- ⑦層：5・6トレンチで、⑥層下で確認できたにぶい黄色のシルト～砂質土層。

【1トレンチ】（図39、写真113・114）

圃地南東隅に、99205調査2トレンチを既に設定していたので、その北側に1トレンチを設定した。地表下80cmで②層、110cmで③層があらわれた。以下は、地表下235cmまで、③層が続く。1トレンチでは、②層は砂礫混じりの褐色灰色粘質シルト層である。

③層上半部は褐～黒褐色の粘質土の湿地堆積物で、下半部は灰褐色砂礫の河川堆積物である。上半部を③-1層、下半部を③-2層とした。③-1層は1a～1d層に分層でき、上層ほど粘性が強く、下層ほど黒みが強い土色となる。③-1a層は褐色粘質土で、粘性は③-1b層よりも強い。上層の②層からしみ込んだ量管状斑文が見られる。③-1b層は、砂礫混じりの褐色粘質土。③-1c層と比べて灰色みを帯び、粘性が強い。

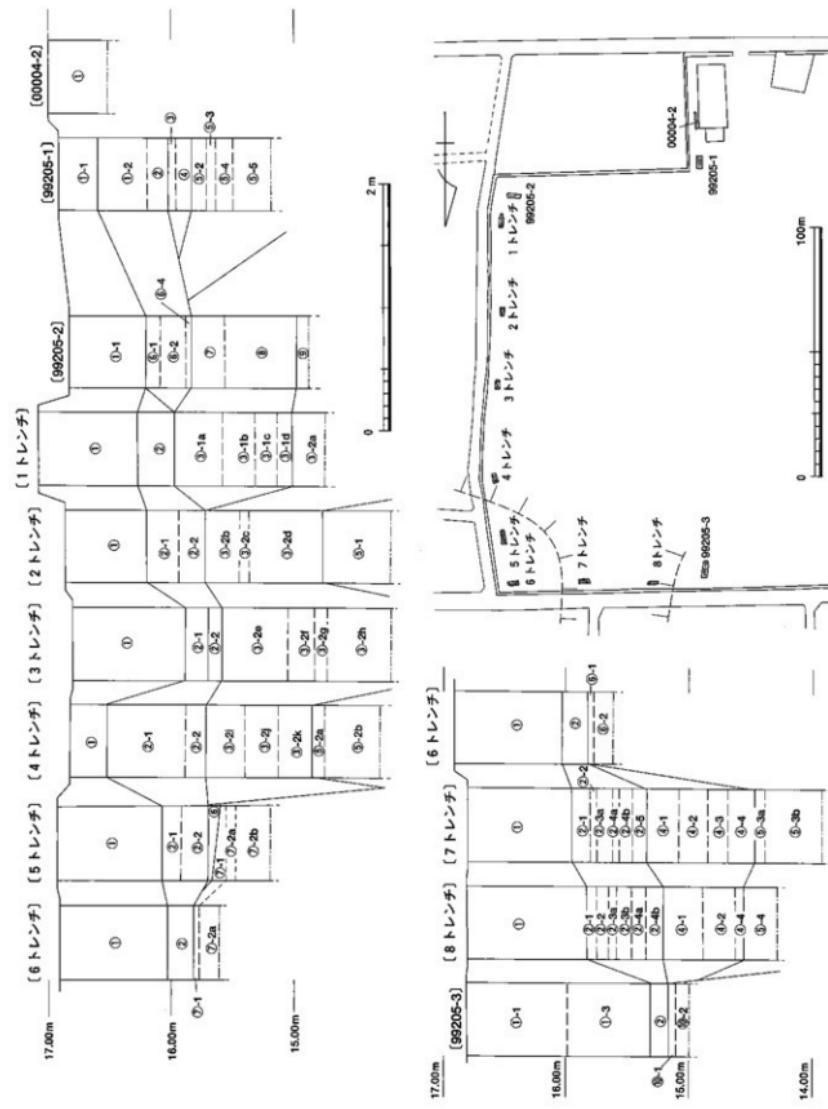


図39 00208調査地点位置図および土質柱状図（縮尺 1/2,000、1/40）



写真112 00208調査2・3トレンチ（北から）



写真115 00208調査2トレンチ（南西から）



写真113 00208調査1トレンチ（北西から）

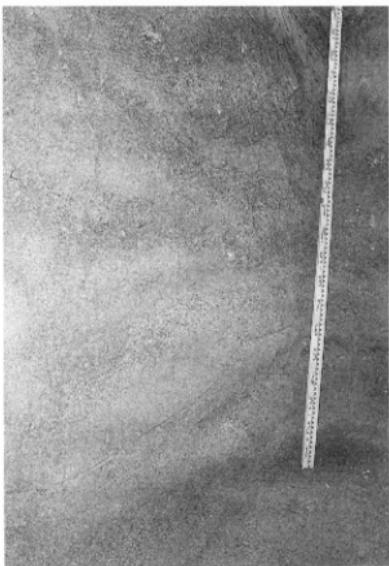


写真116 00208調査2トレンチ東壁下部土層（西から）

未分解のアシやヨシが見られる。③-1c層は黒褐色粘質土層で、未分解のアシやヨシ、径5cm前後の流木が見られる。一部に厚さ2~3cmのレンズ状の灰褐色粗砂層や細砂層が含まれる。③-1d層は下層の③-2層の砂礫層と③-1c層が混合する上層である。③層下半部の③-2層は灰褐色砂礫層。粗砂・細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する。2~4トレンチでも、この③-2層に対応する河川堆積物を確

認しているので、1トレンチの③-2層を、③-2a層とする。

[2トレンチ] (図39、写真115・116)

1トレンチから北側に30mほど離れた位置に2トレンチを設定した。地表下68cmで②層があらわれた。②層の層厚は50cmほどで、上半部の②-1層は砂礫混じりの暗灰色砂質シルト層。下半部の②-2層は、②-1層と比べて、やや灰色みを帯びた灰色粘質土層で、含



写真117 00208調査3 トレンチ（南西から）



写真120 00208調査4 トレンチ（北西から）



写真118 00208調査3 トレンチ東壁土層（西から）



写真119 00208調査4～7 トレンチ（南から）



写真121 00208調査4 トレンチ東壁下部土層(北西から)

まれる砂礫は少ない。

②層下では、地表下115cm前後で③層を検出した。上半部はほぼ水平に互層堆積した河川堆積物、下半部は北から南に向かって斜めに堆積する河川堆積物である。上半部は堆積状況から、1トレンチの③-2層と対応すると考えられる。下半部は、③層に先行する河川堆積物で、⑤-1層とした。

2トレンチの③-2層は、細砂層・粗砂層・小礫層が縞状にはほぼ水平に互層堆積する。1トレンチの③-

2a層との対応をはかれないが、③-2層は2b～2d層に分層できる。③-2b層はオリーブ黄色や灰色の粗・細砂で、径2～4cmの小円礫が2～5cmの厚さでそれぞれ縞状に互層堆積する。③-2c層はオリーブ黄色や灰色の細砂が縞状に互層堆積。③-2d層はオリーブ黄色や灰色の粗・細砂、径2～4cmの小円礫が2～5cmの厚さでそれぞれ縞状に互層堆積する。

また、⑤-1層はオリーブ黄色や灰色の粗・細砂、径2～4cmの小円礫が2～5cmの厚さでそれぞれ縞状

に互層堆積する。後述する4トレンチでも、同様な河川堆積物を確認できている。

【3トレンチ】(図39、写真117・118)

団地東辺のはば中央、2トレンチから25m北側に設定した。地表下90cmで②層を確認した。②層は、上半部の砂礫混じりの灰色粘質シルト層である②-1層、これと比べてやや灰色みを帯び、砂礫が少ない灰色粘質土層である②-2層に分層できる。地表下120cm以下は、260cmまで③層が続く。3トレンチの③層は、細砂層・粗砂層・小砾層が縞状にはば水平に互層堆積した河川堆積物で、2トレンチの③-2層と対応する。

さらに、③-2層は上層から、青灰色細砂層で厚さ1~2cmの微細砂層や粗砂層が縞状に互層堆積する③-2c層、オリーブ黄色粗砂層である③-2f層、灰白色粗砂層に灰色粘土の薄いレンズ状のブロックが混じる③-2g層、灰白色的細砂や粗砂の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する③-2h層に分層できる。③-2h層下部には、薄いレンズ状に樹枝がかたまって出土した。

【4トレンチ】(図39、写真120・121)

団地北東隅から南に45m、3トレンチから北側に35m離れた位置に設定した。地表下30cmで②層があらわれる。上半部の砂礫混じりの暗青灰色粘質土である②-1層、砂礫混じりのオリーブ灰色粘質シルト層である②-2層に分層できる。

地表下110~200cmは、河川堆積物である③層が続く。上半部には、細砂層・粗砂層・小砾層が縞状にはば水平に互層堆積する。1~3トレンチの③-2層に対応する河川堆積物である。2i~2k層に分層できる。

③-2i層は褐色砂礫層。薄い粗砂層・小円礫層が縞状に互層堆積する。③-2j層と②-2j層の界層部分から8世紀前半に比定できる須恵器の高台付壺の口縁部片が出土した。③-2j層は褐色の粗砂層と砂礫層が縞状に互層堆積する。小円礫は混じらない。③-2k層は褐色の粗砂層と砂礫層が縞状に互層堆積し、上層の③-2j層と比べて、砂礫の粒子の大きさが揃う。

地表下200cm以下は、同じ河川堆積物でも、北から南に向かって斜めに落ち込むように、縞状に互層堆積する細砂層・粗砂層・小砾層から構成される。2トレンチの⑤-1層と対応する可能性が高いので、統けて⑤-2層とし、上半部の⑤-2a層と下半部の⑤-2b層に分層した。⑤-2a層は青灰色細砂層。⑤-2b層は、厚さ5~10cmの灰色細砂層・にびい黄色微細砂層・青灰色細砂層が縞状に互層堆積する。

【5トレンチ】(図39・40、写真122・123)

団地北東隅近くの4トレンチと6トレンチの間に、6トレンチで確認できた⑦層が、どのように南に向かって落ちていくかを確認するために設定した。

地表下85cmで②層を確認できた。②層は、上半部の砂礫混じりの暗青灰色粘質土層である②-1層、下半部の砂礫が多く混じる暗オリーブ褐色砂質シルト層である②-2層に分層できる。

地表下125cmで黒褐色砂質シルト層があらわれた。⑥層である。南に向かって次第に厚さを増す。⑥層上面からSK-1が掘り込まれていることを壁面で確認できた。SK-1の埋土は、砂礫が多く混じる黒い強い黒褐色砂質土で、弥生土器片が出土し、北側部分には焼土や炭化物が多く含まれる。また、⑥層中位から、

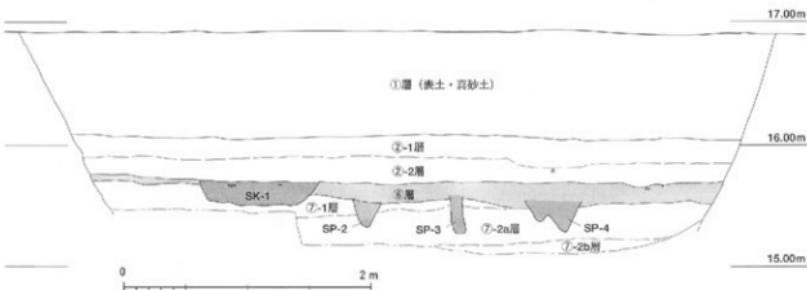


図40 00208調査5トレンチ東壁土層断面図（縮尺 1/40）



写真122 00208調査5 トレンチ (北西から)



写真123 00208調査5 トレンチ東壁SK-1 土層 (北西から)



写真124 00208調査6 トレンチ (南西から)



写真125 00208調査6 トレンチ北壁土層 (南西から)

灰色みを帯びて粘性がややある黒褐色砂質シルトを埋土とするSP-3・4、⑥層下面からも、暗灰黄色砂質土と黒褐色砂質土が混合するSP-2が掘り込まれている。⑥層の下には⑦層が堆積する。上から⑦-1層と⑦-2層に分層できる。⑦-1層は暗灰黄色砂質土に黒褐色砂質土の小塊が点々と混じり、⑥層と⑦層が混合した状態である。⑦-2層にはぶい黄色のシルト～砂質土層で、上半部のにぶい黄色シルト層である⑦-2a層と、下半部のにぶい黄色のきめが細かい砂質土層である⑦-2b層に区分できる。

【6トレンチ】(図39、写真124・125)

団地東北隅に設定したトレンチである。地表下87cmで、暗オリーブ灰色砂質シルトである②層が確認できた。さらに、地表下110cmで⑦層があらわされた。上半部は、暗オリーブ褐色砂質シルトで、5トレンチの⑦-1層に対応する。下半部はにぶい黄色シルト層。

5トレンチの⑦-2a層と対応する。⑦層の上面から小穴が掘り込まれていることを監面で確認できた。

【7トレンチ】(図39、写真126～128)

団地東北隅に設定した6トレンチから西側へ25m離れた地点に位置する。地表下85cmで②層があらわされた。

7トレンチと後述する8トレンチでは、②層は厚く、幾層かの水田層と、これを覆う流水性の砂疊層が互層となって堆積する状況を確認できる。

②-1層は暗オリーブ灰色砂質シルト層。下層にはマンガンが沈着する床土層である②-2層を確認できる。②-2層直下には、灰褐色砂疊層が堆積する。厚さ1cmほどの灰色粗砂ラミナが見られる。洪水によって運ばれた砂疊層で、後述する8トレンチでは、下層の②-4層との間に水田層が確認され、②-3a層とした。②-3a層下には、灰黄色微細砂層が見られ、その下層に灰黄色細砂を含む暗灰褐色粘質シルト層を確認

した。層界は不整合面をなし、水田層とそれを覆う洪水性の砂礫層と考え、灰黄色微細砂層を②-4 a層、下層の灰黄色細砂を含む暗灰褐色粘質シルト層を②-4 b層とした。さらに、②-4 b層下にも、やはり水田層と考えられる砂礫混じりの灰色粘質シルト層が見られる。②-5層とした。

地表下145cmで、砂礫混じりの暗灰色ないし灰色の粘質土層があらわれた。90cmほどの層厚で、湿地性の堆積物である。下層には1・4トレンチの最下面で確認できた⑥層に対応する土層群が見られることから、④層とした。上層から1～4層に分層できる。④-1層は砂礫混じりの暗灰色粘質土で、厚さ1～2cm灰色粗砂や細砂のラミナが点々と見られる。④-2層は砂礫混じりの暗灰色粘質土。④-1層と比べて、ラミナも見られず、砂礫も少ない。未分解のアシやヨシが見られる。弥生土器の細片が数点出土。④-3層は砂礫が多く混じる灰色粘質土。④-4層は暗灰色粘質土。灰色粗砂や細砂のラミナが点々と見られる。未分解のヨシ、アシ、樹枝が見られる。割材と、その周辺から集中して縄文時代晚期の土器片が出土した(写真128)。

地表下235cm以下には、灰褐～灰白色の砂礫層が、南に向かって落ち込むように、斜めに縦状に互層堆積する。2・4トレンチの⑤層に対応すると考えられ、⑤-3層とした。上半部に堆積する灰褐色粗砂層を③-3a層、下半部に見られる灰色や灰白色の粗・細砂が薄く縦状に互層堆積する層を③-3b層とした。⑤-3b層には、樹枝や葉がかたまってレンズ状の堆積となっている部分が見られる。

[8トレンチ] (図39、写真129・130)

8トレンチは、7トレンチと99205調査3トレンチの間に設定した。地表下95cmで②層があらわれた。7トレンチと同じく、幾層かの水田層と、これを覆う洪水性の砂礫層から構成される。②-1層は、砂礫混じりの暗青灰色砂質シルト。②-2層は、砂礫混じりのにぶい黄橙色砂質シルトで、②-1層の床土部分。②-3層は、上部の褐灰色砂礫層の②-3a層と、下部のにぶい黄橙色砂質シルト層である②-3b層に分層できる。水田層とこれを覆う砂礫層である。②-3a層では、ほぼ水平に堆積する灰色粗砂ラミナが点々と見られる。②-3b層には砂礫が非常に多く混じる。②-4層も、水田層とこれを覆う砂礫層である。上部の②-4a層は、にぶい黄橙色砂礫層で、ほぼ水平に堆積する灰褐色粗砂のラミナが点々と見られる。下部の②-

4b層は、砂礫が多く混じる褐灰色砂質シルトで、下部には量管状斑文が見られる。②-4a層との層界は不整合面をなし、水路と考えられる溝の断面を確認できた。7トレンチの②-5層に対応する水田層は見られない。

②層下の地表下160～225cmには、灰色粘質土層が堆積する。④層である。上部ほど砂礫が混じり、暗い土色に変化する。7トレンチの④-1・④-2・④-4層を確認できたが、各土層群の層界は漸移的に変化する。④-1層は、砂礫混じりの灰色粘質土層で、部分的に、灰色粗砂や細砂のラミナが見られる。④-2層は、④-1層と同じ砂礫混じりの灰色粘質土層であるが、砂礫は少なく、ラミナも含まれない。未分解のアシやヨシが見られる。④-4層は灰色粘質土層で、部分的に灰色粗砂や細砂のラミナが点々と見られる。未分解のアシやヨシが見られる。

地表下225cm以下には、北から南に向かって斜めに落ち込むように、ほぼ水平に互層堆積する灰色や灰白色の細砂層・粗砂層から構成される河川堆積物が見られる。④-4層との境界部に集中して径5～8cmの樹枝が多く含まれる。⑤-4層とした。

3 調査のまとめ

今回の調査では、点的にではあるが、山越団地の東辺に集中してトレンチを設定し、堆積している土層群の観察を行った。結果、以下のようないくつかの分布状況を把握できた。『集報Ⅰ』の99205調査の報告に一部訂正を加えながら整理する。

- (a) 表土下の②層は、団地造成以前の水田層であるが、今回調査の7・8トレンチで検出した②層下半の②-3・②-4層には、さらに古い水田層が含まれる。地点的には、後述する7・8トレンチ付近を南北に流れる旧河道が埋没し湿地化する谷状の窪地に位置する。調査範囲が狭く、出土遺物もないため、水田層の時期は不明だが、洪水性の砂礫層で覆われているため、田面の遺存状況はよい。
- (b) 今回の調査では、5・6トレンチで、黒褐色砂質シルト層である⑥層、暗オリーブ褐色砂質シルト層やにぶい黄色シルト層の⑦層を確認し、⑥・⑦層を切り込む弥生時代の造構を検出した。団地北東隅付近には、当該期の造構が分布することは明らかである。
- (c) 5・6トレンチで検出した⑥層と⑦層に対応す



写真126 00208調査 7 トレンチ（南西から）



写真127 00208調査 7 トレンチ北壁土層（南西から）



写真128 00208調査 7 トレンチ④-4層遺物出土状況
(西から)

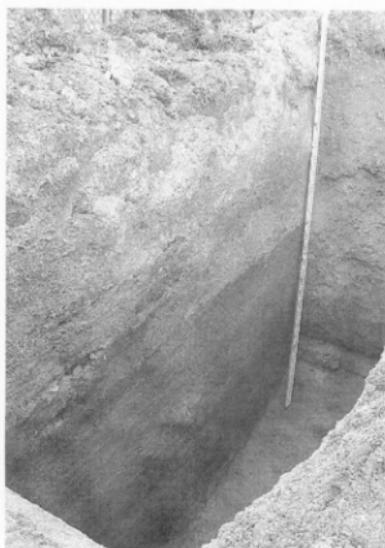


写真129 00208調査 8 トレンチ（南西から）



写真130 00208調査 8 トレンチ北壁下部土層(南西から)

る土層群は、団地北東隅から80mほど離れた99205調査3トレンチでも確認できている。99205調査で⑩-1層とした土層は今回の⑥層、⑩-2層は今回の⑦層に対応すると考えられる。ただし、⑥層上面の検出レベルは、今回調査の6トレンチと比べて、65cmほど低い。今回調査の7・8トレンチ付近を南北に流れる旧河道を挟み、低い微高地が99205調査3トレンチより西側に広がり、何らかの遺構が営まれている可能性が考えられる。

(d) 団地東辺で南北方向の延長線上に設定した1～6トレンチでは、4・5トレンチ間で⑥・⑦層が南に向かって落ち込み、4トレンチ以南では湿地・および河川堆積物である③層を確認でき、東西にのびる旧河道を想定できる。この旧河道の埋没時期は、4トレンチ③-2i層と②-2層の層界部から8世紀前半に比定できる須恵器の高台付帯の口縁部片が出土したことから、8世紀前半にはほぼ埋没を終わり、1トレンチ③-1層に示されるように、一部が湿地環境に変遷するものと考えられる。

(e) 今回調査の1トレンチ南側に位置する99205調査では、2トレンチの、⑦・⑧層が今回調査の③-1層に対応する湿地堆積物、⑨層が今回調査の③-2層の河川堆積物である。⑩層も、やはり湿地堆積物と考えられる。さらに、99205調査1

トレンチの①-2・②層も、この湿地堆積物と対応するものと考えられる。99205調査1トレンチ③層は灰黄褐色砂層、④層はやや灰色みを帯びる暗茶褐色ないし灰黄褐色シルト層、⑤層は砂層および砂礫層で、より南側に旧河道が移動しながら、河畔に湿地が形成されていく過程をトレースできる。

(f) 今回調査の7・8トレンチでは、⑤層の河川堆積物に示される旧河道が路路を南に変えることで湿地環境となり、④層が堆積する。7トレンチ④-2層から弥生土器片、④-4層から縄文時代晚期の土器片が出土することから、かなり長期間にわたり湿地環境が続いたと考えられる。その間で、出土した土器片や割材に示される遺物包含層が形成される。

以上、今回の調査では、団地北東隅付近で弥生時代の遺構が営まれる微高地、その南側で旧河道を確認できた。この旧河道は、次第に南に流れを変え、河畔には湿地が形成される。また、団地北東隅から西側では、旧河道が埋没し湿地化する過程で形成される縄文時代晚期～弥生時代の遺物を包含する土層群を検出でき、さらに上層に水田が営まれることを把握できた。

こうした調査成果から判断して、山越地区東辺部付近で、深い掘削を伴う工事に際しては、発掘調査が必要である。

(田崎)

00209 (城北)総合研究棟新営電気・機械設備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町2番5号
愛媛大学城北団地地理学部構内(図1)
調査面積 22.6m²
調査期間 2003年1月23～29日
調査の種別 立会調査
調査担当 田崎博之
調査補助 宮崎直栄
依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
(平成14年12月26日付)

1 調査にいたる経緯

理学部構内で建設中の総合研究棟に付設される電気設備と機械設備の計画が、施設部から提示された。協議を重ね、文京遺跡21・24次調査(調査番号:

00003・00105)の調査成果を考慮して、管路部分は表土層部分におさめること、掘削深度が深い耕部分については立会形式の調査を実施することとした。

2 調査の記録

今回の調査地点は6箇所で、調査順に1～6トレンチの名称を与えた(図41、写真131)。

【1トレンチ】(図42右、写真132～134)

AO-58区に位置する。21次調査I区南西隅で確認できた縄文前期の遺物溜まり(SX-417)の南側に接する地点であり、城北団地基本層序のV層上面まで掘り下げる調査を行うこととした。

地表下30cmでII層、53cmで灰黄褐色砂礫層があらわれた。径5～20mmの砂礫の薄いレンズ状ブロックが縞



図41 00209調査地点位置図（縮尺 1/1,500）

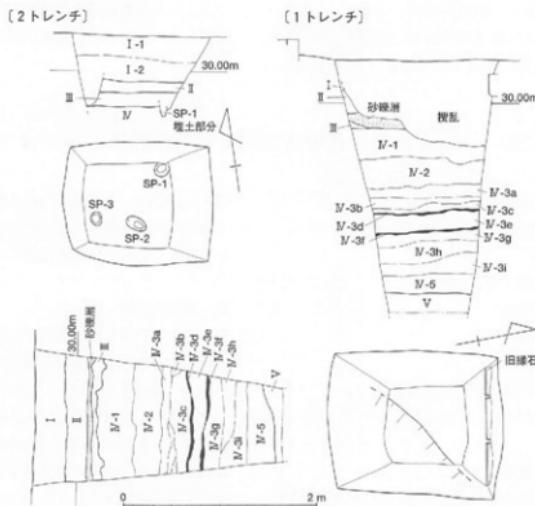


図42 00209調査1・2トレンチ実測図（縮尺 1/50）



写真131 00209調査 調査風景



写真132 00209調査1 トレンチ（北東から）

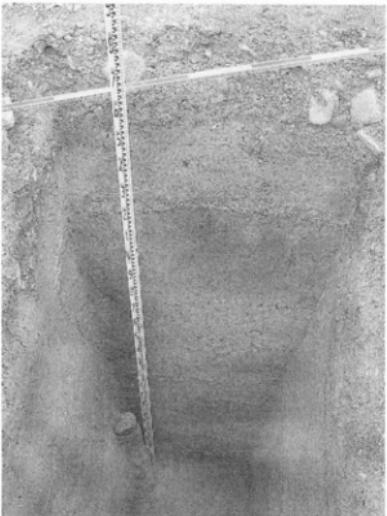


写真133 00209調査1 トレンチ南壁土層（北から）



写真134 00209調査1 トレンチ西壁土層（東から）



写真135 00209調査2 トレンチ遺構検出状況（南西から）



写真136 00209調査2 トレンチ東壁土層（西から）

状に重なり、流水によって生じた堆積物である。位置的には、文京遺跡21次調査I区南辺で出土したSD-5・6との関係も想定できるが、確実ではない。その下層で、5~12cmの厚さの暗褐色砂質土層である、城北団地基本層序のⅢ層を確認できた。1~2cm大の丸い暗赤褐色シルト塊がまばらに混じる。ただし、北側は搅乱と上層の灰黃褐色砂礫層で削られ、調査区南端で部分的にしか残存していない。Ⅲ層からは土器細片が数点出土したが、遺構は検出できなかった。

地表下60~70cmでⅣ層があらわれた。165~180cmの層厚があり、21次調査の調査成果にあわせて分層を行い、Ⅳ-1・Ⅳ-2・Ⅳ-3・Ⅳ-5層に対応する土層を確認した。Ⅳ-1層にはぶい黄褐色砂質シルト。しまりがある。Ⅳ-2層にはぶい黄褐色砂質土。5mm大の小さな角礫が多く混じり、ややサクサクした質感である。Ⅳ-3層は黄褐色~暗褐色の砂質土~砂礫が縦状に重なる土層群である。3a~3i層に分層できる。Ⅳ-3a層は3~10mm大の角礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土。わずかに灰色みを帯びる。Ⅳ-3b層は径3~5mmの砂礫が多く混じる褐色細砂。しまりがある。Ⅳ-3c層にはぶい黄褐色微細砂層。Ⅳ-3d層は暗褐色砂質土。Ⅳ-3e層にはぶい黄褐色の微細砂と暗褐色の微細砂が混じり合う。Ⅳ-3f層は暗褐色砂質土。Ⅳ-3g層は褐色微細砂層とやや灰色みを帯びた微細砂が混じり合う。Ⅳ-3h層は、Ⅳ-3g層と比べて、わずかに灰色みを帯びる。Ⅳ-3i層は、褐色細砂とぶい黄褐色細砂が混じり合う。Ⅳ-5層は、褐色砂質土からやや灰色みを帯びて白っぽく見える砂層になる。21次調査では、Ⅳ層上半部にあたるⅣ-1・Ⅳ-2層で縄文後期、Ⅳ-5層で縄文前期の遺物溜まりなどを検出しが、今回の調査では、遺構・遺物は出土していない。

Ⅳ層下層では、ぶい黄褐色砂礫層であるV層を確認した。V層上面は南東に向かって緩やかに落ち込んでいく。

[2トレンチ] (図42左上、写真135・136)

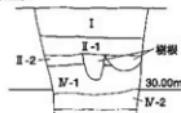
1トレンチの北側約5mのAO-59区に位置する。表土部分のI層は、真砂土のI-1層、オリーブ褐色砂質土層のI-2層が客土されていた。地表下45cmでII層、58cm前後でIII層の上面があらわれた。II層は角礫や小石混じりのぶい黄褐色砂質土で、5~10mm大の黒褐色土塊がまばらに混じる。III層は暗褐色砂質土で、やや粘性を帯びる。径5mmの丸い黒褐色シルト塊が少量混じる。土器片が出土したが、細片化しており、時

期・器種は不明。地表下約70cmでIV層があらわれる。IV層は黄褐色砂質シルトで、その上面でSP-1~3の小穴を検出した(写真135)。いずれも、IV層上面から深さ5~10cmの不整円形の小穴で、埋土はⅢ層と共に暗褐色砂質土である。SP-1は、調査区壁面の観察では、Ⅲ層下半部分から掘り込まれている。

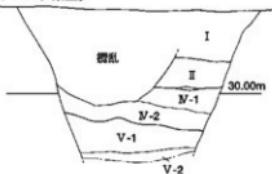
[3トレンチ] (図43上、写真137・138)

理学部構内南東隅のAC-58区に位置する。地表下48cm前後で、城北団地造成以前の水田層であるII層があらわれた。耕作土層にあたるII-1層と床土層のII-2層に細分できる。3トレンチではⅢ層は見られず、地表下75cmでIV層があらわれる。上層部分のIV-1層とIV-2層を確認できた。IV-1層はしまりのあるぶい

[3トレンチ東壁]



[4トレンチ東壁]



[5トレンチ]

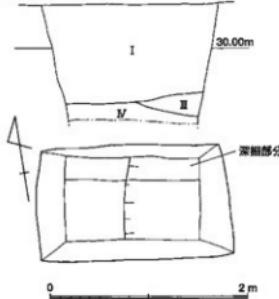


図43 00209調査3・4トレンチ土層断面図および5トレンチ実測図(縮尺1/50)



写真137 00209調査3 トレンチ（西から）



写真138 00209調査3 トレンチ東壁土層（西から）



写真139 00209調査4 トレンチ（南西から）



写真140 00209調査4 トレンチ東壁土層（西から）



写真141 00209調査5 トレンチ近景（南西から）



写真142 00209調査5 トレンチ（南西から）

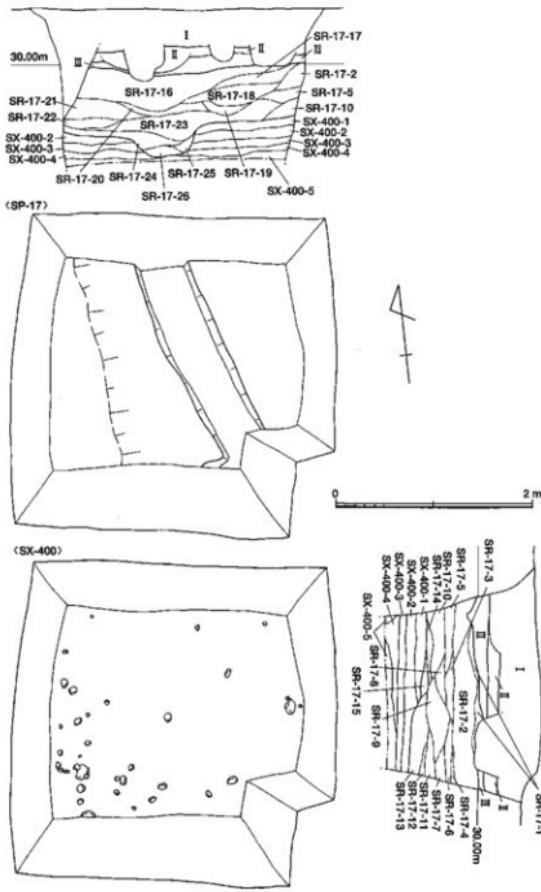


図44 00209調査6 トレンチ実測図（縮尺 1/50）

黄褐色砂質シルト。IV-2層はにぶい黄褐色砂質土である。

3トレンチでは、遺構・遺物は出土していない。

【4トレンチ】(図43中、写真139、140)

理学部西側通用門の南にある温室の南東側のAC-66・67区に位置する。大部分を擾乱されているが、地表下45~50cmで、径3~5mmの小礫が多く混じるにぶ

い黄褐色砂質土であるII層を検出した。3トレンチと同じく、II層下にIII層は見られず、IV層があらわれる。ただし、層界には、灰白色砂礫の薄いレンズ状ブロックが部分的に見られる。

IV層は、上部が砂礫混じりのシルト質土のIV-1層であるが、下部ほど砂礫および径1~3cmの円礫を含み、IV-2層に変化する。土質はしまり、二次堆積と



写真143 00209調査 6 トレンチSR-17 (南から)

写真144 00209調査 6 トレンチSX-400
遺物出土状況 (南東から)

写真145 00209調査 6 トレンチ東壁土層 (西から)



写真146 00209調査 6 トレンチ北壁土層 (南から)

は考えられない。地表下105~120cmでV層を確認した。V層の上面は、南に向かって緩やかに落ち込む。V層上部のV-1層は灰黄褐色砂礫層。厚さ2~4cmに砂・細砂・砂礫が縞状に互層堆積する。V-2層は灰黄褐色砂礫層で、径2~8cmの円礫が多く混じる。

【5 トレンチ】(図43下、写真141、142)

動物飼育室の南側のAI-66・67区に位置する。地表下90~100cmまで擾乱が著しいI層が続く。調査区西側では、I層直下でびい黄褐色砂質シルトのIV層があらわれる。IV層を20cmほど掘り下げる、白っぽくやや砂質が強くなる。このIV層上面は、東に向かって緩やかに落ち込み、調査区東半では、その上部に暗褐色粘質シルトのIII層が堆積する。III層からは土器片などは出土していないが、炭化物片が多く混じる。また、III層上部はやや黒みが強い。

【6 トレンチ】(図44、写真143~146)

21次調査 I 区北東隅と24次調査北西隅が接するAG・AH-64・65区に位置する。21次調査の成果から、この地点には弥生後期終末に埋没する自然流路SR-17、その下層に绳文晚期終末~弥生前期初頭の上器つまりであるSX-400の広がりが予想された。

調査では、地表下35cmでびい黄褐色砂質土のII層、45cmで3~10mm大の角礫が多く混じる黒褐色質土のIII層があらわれ、III層直下で21次調査SR-17の広がりを検出した。

SR-17(遺構名は21次調査の遺構名を汎用)は50~82cmの厚さで、下底面には、幅55~60cm、深さ30cmほどの溝状の凹みが南東から北西に向かって延び、その凹みに向かって傾斜する(写真143)。埋土中からは、遺物はほとんど出土していない。埋土は、灰黄褐色・黄褐色・びい黄褐色・黒褐色の砂礫や砂質土が薄い

レンズ状となって縞状に堆積する。SR-17埋土は、1～26層に分層できる。

1～15層は調査区東壁で確認した土層群である。1層は5～10mmの大いな角礫が多く混じる黄褐色砂礫層。2層にはぶい黄褐色砂質土で、上部は5mmの大いな角石が多く混じり、下部はきめ細かい砂質土。3層はやや灰色みの強い灰黄褐色砂層。5mmの大いな角石が少量混じる。4層にはぶい黄褐色砂細層。5層は暗褐色砂質土。やや粘性があり、下の土層群よりもやや黒みを帯びる。6層にはぶい黄褐色細砂層で、5mmの大いな角礫や小石がまばらに混じる。7層にはぶい黄褐色砂礫層。8層は黒褐色砂質土。やや粘性があり、3mmの大いな角石を少量含む。9層にはぶい黄褐色のきめ細かい砂層。10層はやや粘性を帯びた暗褐色砂質土。11層は5mmの大いな角石が多く混じる褐色粗砂層。12層にはぶい黄褐色細砂層。13層は灰黄褐色粗砂層で、1cm大いな角礫や小石をかなり多く含み、下部には5cmの大いな円礫が混じる。14層にはぶい黄褐色砂質土で、3～5mmの大いな砂礫が多く混じる。15層にはぶい黄褐色粘質土で、下層に堆積する黒褐色粘質土の径5cmほどの丸い土塊を含む。

16～23層は、調査区北壁で確認した土層群。16層は小石混じりの黄褐色砂礫層。17層にはぶい黄褐色粗砂層。18層は小石や大きな礫を含むにぶい黄褐色粗砂層。19層は黄褐色細砂層。20層にはぶい黄褐色砂礫層、21層は小石混じりの黄褐色砂礫層。22層は黄褐色細砂層。23層は黄褐色砂質土と小石が混じる砂礫層。24層は西側から流れ込むにぶい黄褐色砂礫層。25・26層はSR-17下底面の溝状の窪みを埋める堆積物で、25層は黄褐色砂礫層。26層は粗砂と細砂が薄いレンズ状になって縞状に重なる。

SR-17の下層では、21次調査で検出できた縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器滯まりSX-400（遺構名は21次調査の遺構名を汎用）の広がりを確認した。21次調査で確認していた土層群に分層し精査した。1層は粘性が強い暗褐色粘質土層。2層は粘性が強い黒褐色粘質土層で、3～20mmの大いな角石・礫がまばらに混じる。3層にはぶい黄褐色粘質土で、2～5mmの大いな角張った小石を少量含み、下部ほど多くなる。4層は2～5mmの大いな角石が多く混じる黒褐色砂質土層。5層にはぶい黄褐色砂質土で、5～30mmの大いな礫が多く混じる。以上の土層群の中で、1層は調査範囲の西側でSR-17に削り取られ、部分的にしか残らず、出土遺物も少ない。

2・3層は比較的厚く、10数点の土器片や円礫が出土した（写真144）。4層からは1点の土器片が出土したのみである。最下層の5層からは、南西部にかたまって土器片と円礫が出土した。しかし、全体に遺物量は少なく、SX-400の東への広がりは、6トレンチでは途切れると考えられる。

3 調査のまとめ

今回は、調査範囲が狭く、調査地点も散在し、出土した遺構や遺物も少ないが、文京遺跡21次調査の成果に補足を加えることができた。

まず、1トレンチでは、21次調査I区南西部のAN・AO-58-60区のIV-1・IV-2・IV-3・IV-5層に対応する土層を確認した。ただし、いずれの土層からも遺構・遺物は出土していない。とくに、IV-5層においては、21次調査SX-417に続く縄文前期の遺物滯まりを想定していたが、遺物出土は皆無で、SX-417はAN・AO-58北半部までしか広がらないことが明らかにできた。

4トレンチでは、V層の上面が南に向かって緩やかに落ち込んでいくことを確認した。これに対応するV層の北側への落ち込みは、21次調査III区AB・AC-69区で確認されており、南北幅13～14mの舌状の高まりがあり、これに規制された弥生後期終末に埋没する自然流路SR-17の最大幅を確定できる。また、5トレンチでは、IV層上面が東に向かって緩やかに落ち込み、調査範囲の東半部には上層に暗褐色粘質シルトのⅢ層が堆積している。21次調査I区SR-17の西端部と考えられる。

6トレンチでは、21次調査自然流路SR-17と、縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器滯まりであるSX-400の延長部分を把握できた。とくに、今回の調査では、SX-400に対応する土層群からの出土遺物は少なく、調査範囲の西半部に偏った分布を見せる。SX-400の東側への広がりは、6トレンチからそれほど延びないものと考えられる。

なお、6トレンチ出土遺物については、文京遺跡21次調査の報告とともに、詳細を報告したい。

4 調査後の対応

以上の成果をあげ、以後の復工事を依頼して、調査を終了した。

（田崎）

00210 (城北) 情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営 電気設備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番
愛媛大学城北団地(図1)
調査面積 13m²
調査期間 2003年1月15日
調査の種別 立会調査
調査担当 吉田広
調査補助 宮崎直栄
依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
(平成15年1月15日付)

1 調査にいたる経緯

埋蔵文化財調査室では、情報教育棟新営工事に先だって、建設範囲について事前に文京道跡25次調査(調査番号:00202)として、全面調査を行ったところである。ただし、建物建設に伴う掘削深度が地表下300cmに留まることから、それ以下の遺物包含層については調査対象としないまま、調査を終了していた。

ところが、発掘調査終了後着手した情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営電気設備工事において、



図45 00210調査地点位置図および土層柱状図
(縮尺 1/400、1/40)

総合情報処理センターに伴う接地盤の更新の必要が生じた。そのため、新営建物基礎部分を外した位置に、現地表下300cmの現状からさらに100cm掘削して、新たな接地盤埋設を行うこととなった。埋蔵文化財調査未到達の深度であり、埋蔵文化財調査室では、急遽立会調査を実施することとした。

2 調査の記録(図45、写真147)

調査地点は、総合情報処理センター建物北西コーナーの北東約4m、建物基礎の間になる。既往調査との対応では、18次調査(調査番号:99802)範囲内である。情報教育棟新営基礎工事に併せて、地表下約300cmで整地・碎石敷設した面からの掘削となった。

碎石敷設の厚さは約10cm。その下にまず、径0.5mm前後の砂粒からなり、しまりの弱い、にぶい黄色砂層(①層)が約30cmある。鉄分の沈着面を挟んで、径0.5~3mmの砂粒をベースに、1~20cm大の円礫を多数含む、しまりの弱い黄褐色砂礫層(②層)となり、厚さは約30cm。さらに下層には、径1mm前後の砂粒からなり、しまりの弱い、にぶい黄色砂層(③層)が、25cm以上堆積する。掘削深度はこれまで標高24mを切り、地表下400cmに達している。

25次調査では、未掘のまま残した古代の自然流路内堆積がかなりの範囲で広がっている。ただし、調査地点付近の25次調査区南西隅部では、直上に城北団地基



写真147 00210調査地点(北西から)

本層序Ⅲ・Ⅳ層の再堆積が認められる砂礫層の上面を検出し、古代以前の自然流路の川岸と判断していた。①～③層は、この砂礫層より下位にあり、しまりが弱いものの、遺物を出土していない。したがって、砂礫層上面を城北団地基本層序V層上面として、①～③層が

V層内の細分層である可能が高い。

3 調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して、調査を終えた。(吉田)

00211 (城北) 総合研究棟等改修電気設備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番
愛媛大学城北団地(図1)
調査面積 1.9m²
調査期間 2003年3月3・4日
調査の種別 立会調査
調査担当 田崎博之・三吉秀充
依頼文書 施設部施設課長発事務連絡
(平成15年2月24日付)

1 調査にいたる経緯

総合研究棟(旧工学部本館)改修電気設備工事に伴って、統合車庫西側2箇所に外灯を設置することとなった。施設部からは、工事に際して、管路部分が地表下84cm、外灯基礎部分は130cmまで掘削が及ぶことが示された。周辺の既往調査(調査番号:98802、99511)成果から、埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想され、立会調査を実施することとした。

2 調査の記録

統合車庫南端の西側が1トレンチ、総合研究棟北東コーナー部が2トレンチである(図46)。

【1トレンチ】(図47左、写真148)

トレンチ東半部では、道路面下50cmで共同溝の上面を検出した。西半部は、予定掘削深度である地表下130cmまで調査を行ったが、共同溝設置に伴う擾乱が続く。ただし、共同溝設置に伴う擾乱の西端は、調査範囲内で確認できなかった。

【2トレンチ】(図47右、写真149)

トレンチ北端の道路面下50cmで共同溝の上面を検出した。共同溝設置に伴う擾乱の立ち上がりは、共同溝の南端から南へ約1mの地点で検出できた。道路面下70cmまで調査を行い、城北団地基本層序のIV層まで擾乱が及ぶことを確認した。

トレンチ南半部は、瓦礫を伴ったI層が道路縁石を

基準として地表下30～50cmまで続く。城北団地基本層序II層はにぶい黄褐色シルトで、丸い黄灰色シルトのブロックが混じる。遺物は出土していないが、既往の調査成果から、近世の水田層と考えられる。地表下40cmで、城北団地基本層序のIII層を確認できた。III層は灰褐色系の土色であるが、砂粒の入り具合から、III-1層とIII-2層に分層が可能である。III-1層は灰黄褐色砂質土。きめは細かく、径1mm前後の砂粒から小指先大の円礫が多く混じる。砂粒、砂礫は薄い層状をなし、面的に広がる。III-2層は、灰褐色砂質土。きめが細かく、径1～2mm前後の砂粒が混じるもの。III-1層に比べて砂粒の割合は少なく、不定形の炭化物がごく少量出土。III-2層からは弥生土器片がまばらに数点出土しているが、土器の表面が摩滅し、時期の詳細は不明。III層の下、地表下65cmで城北団地基本層序IV層を確認した。

3 調査のまとめ

2トレンチでは城北団地基本層序のIII層を検出したが、III-1層は砂粒や砂礫を多く含み、堆積状況から洪流水砂である可能性が高い。一方、III-2層は、色調などはIII-1層に共通するものの、砂粒・砂礫は少ない。城北団地内に網目状に延びる谷状の窪地(旧河道)の最上層に、同様の土層が堆積していることが知られている(調査番号:99602-6)。2トレンチ周辺にも谷状の窪地が延びる可能性が高い。

4 調査後の対応

その後、慎重工事を依頼して、調査を終えた。

(三吉)



図46 00211調査地点位置図（縮尺 1/1,000）



写真148 00211調査 1トレンチ（北から）



写真149 00211調査 2トレンチ（北から）

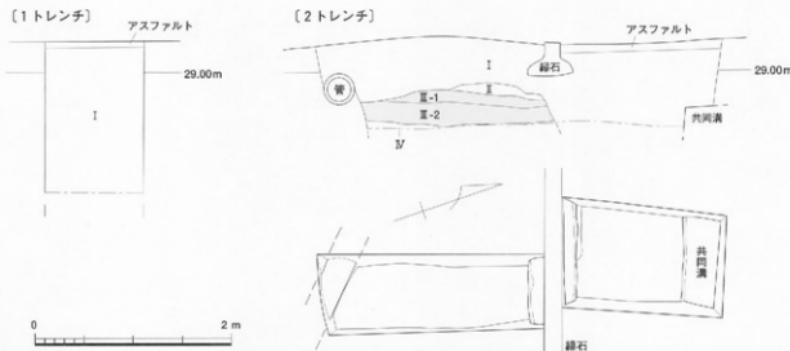


図47 00211調査 1トレンチ土層柱状図および2トレンチ実測図（縮尺 1/40）

IV 構内の遺跡

1 調査の手続き

埋蔵文化財調査室では、愛媛大学構内における地盤掘削を伴う工事について、規模の大小にかかわらず、施設部を通じて工事内容の報告を求めている。通常、年度当初に工事計画の照会を、施設部を通じて行っているが、年度途中で急遽工事計画が持ち上がることも少なくない。これら工事すべてに対して、埋蔵文化財調査室では、周辺の既往調査成果等から、工事が埋蔵文化財に及ぼす影響を判断し、その内容に応じた対応を取っている（図48）。

まず、工事計画段階から連絡調整が図られる場合には、埋蔵文化財への影響を及ぼさない、あるいは最小限に留める工法変更等を講じることができる。また、埋蔵文化財への影響を判断する材料が乏しければ、事前に試掘調査を行うこともある。埋蔵文化財保護の観点からだけでなく、工事時間・費用の軽減からも、工事計画段階からの連絡調整の意義は大きい。

その上で決定した具体的な工法に基づき、埋蔵文化財発掘調査の要否及び実施の依頼を、工事担当部局から埋蔵文化財調査室が受け、調査の要否を判断することになる。

埋蔵文化財に影響がないと判断した場合は、埋蔵文化財調査室から、調査不要として慎重工事の依頼が担当部局に回答され、施工に及ぶ。

一方、調査必要ながら、小規模工事で埋蔵文化財調

査にあまり時間を要さないと判断した場合、掘削工事に伴って調査を実施する立会調査を行うことになる。そして、先の依頼に対する回答としては、立会調査結果の報告が、埋蔵文化財調査室から担当部局に提出される。

他方、工事規模が大きく、埋蔵文化財調査にもかなりの時間を要すると判断した場合は、工事に先立ち、本格調査を実施することになる。本格調査にあたっては、具体的な発掘調査計画の作成、それに基づく設計・積算・契約、さらには文化財保護法に基づいた発掘調査関係書類の関係官庁への届出がなされて、初めて調査に着手することになる。また、調査終了後にも、発掘調査関係書類の届出や実績報告が関係官庁になされねばならない。そして、調査依頼を受けた担当部局に対しても、先の依頼に対する回答として、調査結果の概要報告が、埋蔵文化財調査室から提出される。

以上で実地の発掘調査は終了するが、発掘調査によって出土した資料の整理・報告が、埋蔵文化財調査室の業務として継続される。記録保存としての発掘調査の終了は、この正式報告書の刊行によって初めて完了するのである。さらに、その後の資料保管も埋蔵文化財調査室が行っており、これに伴った資料公開・利活用についても、埋蔵文化財調査室が対応している。

（吉田）

2 遺跡の把握状況

上記した手続きにより繰り返されてきた愛媛大学構内における調査は、2003年12月末時点で、161件を数える（表8）。これらの結果、愛媛大学構内の遺跡について、各団地毎にかなり具体的に状況を把握することができるようになってきた。と同時に、今後の工事等における埋蔵文化財への影響を判断する有用なデータとして機能し、遺跡の現状保存・保護をはかるグリーンゾーンの範囲指定根拠ともなっている。

以下、各団地毎に、遺跡の把握状況を概述する。

（1）城北団地

城北団地には、法文学部・教育学部・工学部等が所在する松山市文京町3番と、理学部他の所在する松山市文京町2番5号、そして大学事務局他が所在する松

山市道後極又10番13号が含まれる。

1951年頃から遺物が採集され、文京遺跡として埋蔵文化財附蔵地とされており、大学構内では1~3・5~28次にわたる本格・確認調査と試掘・立会調査で、縄文時代前期から近世に及ぶ集落遺跡・生産遺跡であることが判明している。

とりわけ、文京町3番構内においては、その西南部を中心に、全国的にも有数の弥生時代中期後葉～後期中葉の集落が展開し、一部には古墳時代後期の集落も重なる。またその北側には、古代末から中世（10~13世紀）の水田層が確認されている。この他にも、縄文時代前～後期の遺跡や、中世（14世紀）の水路、近世（18世紀）の水路も確認され、さらには戦前の練兵場

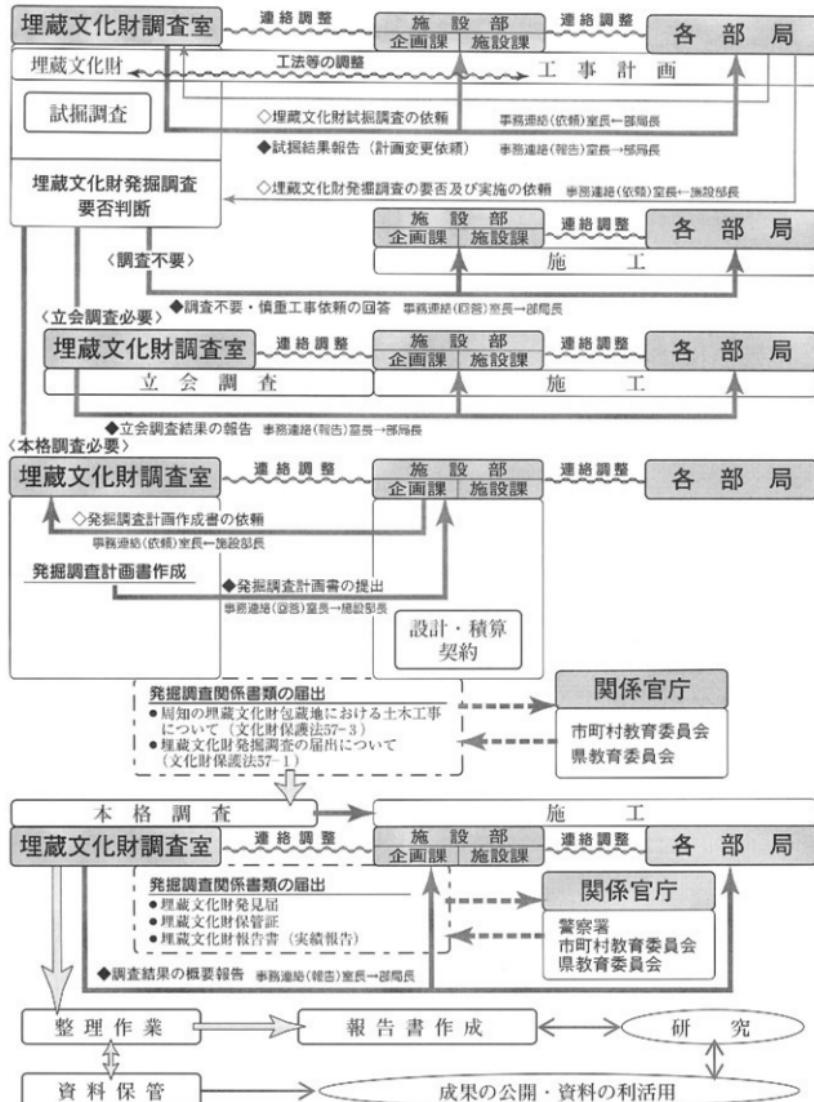


図48 埋蔵文化財調査に関わる手続きフローチャート

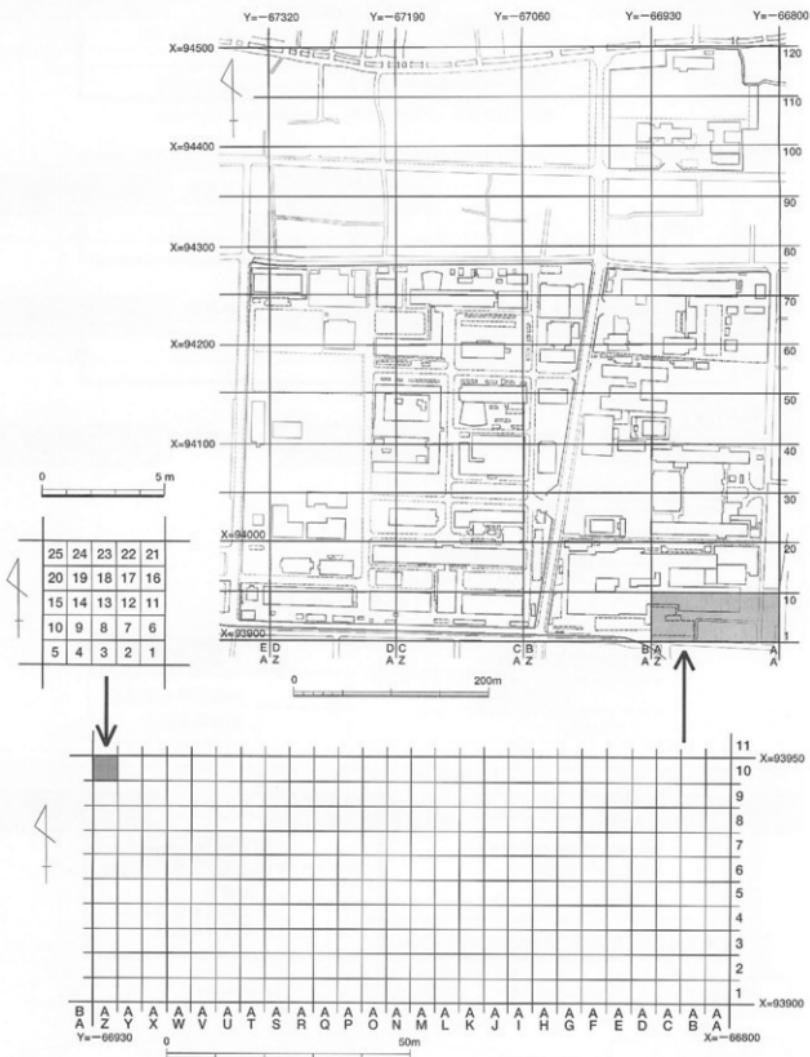


図49 城北団地の区割（縮尺 1/5,000、1/1,000、1/200）

時代の遺構も見出すことができる。他方、理学部構内においては、弥生時代や古代・中世の遺構も存在するが、縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての遺跡が、特徴的に存在する。事務局構内については、これまで数回の調査を行ってきたが、明確な包含層・遺構は確認していない。

なお、このような展開を見せる文京遺跡のうち、弥生時代中期後葉～後期中葉の集落の主要部分について、グリーンゾーンとして積極的に活用を図っていくことが明らかにされている。具体的には、大型掘立柱建物群が確認されている、法文学部本館西側駐車場周辺 $1,270\text{m}^2$ と、総合情報処理センターと工学部1号館間の旧グラウンド部分 $5,525\text{m}^2$ である。

城北団地の調査にあたっては、独自の区割と基本層序を設定している。1998年に設定した区割は、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第IV系の、 $(X=93900, Y=-66800)$ を基点として、東から西へ向かって5mおきに、AA・AB……AZ・BA・BB……ED・EE・EF、南から北へ向かって5mおきに、1・2・3……118・119・120とし、両者を組み合わせた5m方眼の調査区画によるものである。さらに必要に応じて、この区画内を1m方眼に分け、南東隅から西に1～5、そして北隅列を6～10と、北西隅に到る25区画に細分する。したがって、この1m方眼を示す場合は、「DC27-14」のように呼称することとなる（図9）。

城北団地内の基本層序については、上位からI～V層を設定している。その上で、各調査では大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けている。基本層序の内容は以下の通り。

- I層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
- II層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
- III層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層。
- IV層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。縄文時代の遺構・遺物が確認されている。
- V層：IV層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層である。

（2）樽味団地

松山市樽味3丁目5番7号の樽味団地には、農学部・附属高等学校・附属研究施設等が所在する。

団地西部は、樽味遺物包含地として埋蔵文化財包蔵地とされ、1987年の1次調査以降、樽味遺跡として団地内は調査・報告されている。以後7次に及ぶ本格調査と小規模な試掘・立会調査により、弥生前期から中世に及ぶ集落遺跡であることが判明している。

具体的には、まず団地西半部において中世（14～16世紀）の方形区画を有する集落が面的に広がる。さらに団地北西部では、弥生前期の集落と古墳時代後期の集落も確認されており、後者は団地周辺の樽味立派遺跡や樽味高木遺跡と一連の遺跡の可能性が高い。一方、団地南部には、古代末から中世（10～14世紀）に埋没する、西流する自然河道が存在する。附属農業高等學校の所在する団地東部では、4次調査で古代（8世紀）に埋没する、南流する自然河道や、古代末から中世（10～12世紀）の遺物包含層が存在する。団地西半とは若干異なる時代の遺跡が展開している可能性が高い。

樽味団地の調査にあたっては、団地全域にわたる独自の区割設定はしていないが、基本層序は設定している。上位からI～V層で、各調査では大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けている。基本層序の内容は以下の通り。

- I層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
- II層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
- III層：遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。
- IV層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。

V層：IV層下の花崗岩を主体とする砂礫層ないし礫層。

（3）鷹子団地

松山市鷹子町40番に所在する鷹子団地には、国際交流会館が所在する。

1987年に、国際交流会館建設に先立って、鷹子遺跡1次調査（調査番号：98701）が行われ、弥生時代中期後葉、古代（7・8世紀）、中世（13・14世紀）の遺構・遺物が確認された。この調査によって、団地内の大半を調査したことになるが、建物周辺には、なお遺跡の残存することは間違いない。

（4）北吉井団地

松山市桑原2丁目9番8号の北吉井団地には、教職員宿舎が所在する。

1994年に東長戸他環境整備（駐車場整備・配管設置）工事による立会調査（調査番号：99401）、1997年に北吉井宿舎屋外排水管改修工事による本格調査（調査番号：99710）と北吉井宿舎屋外ガス管改修工事による立会調査（調査番号：99711）が行われている。その結果、古墳時代中～後期（5～7世紀）、古代（10世紀）の集落遺跡が団地全面に展開することが確認され、上記3次の調査を桑原西稲葉遺跡3～5次調査として報告している。なお、北吉井団地内の基本層序は、北方約150mに位置する樽味団地の基本層序が適用できる。

(5) その他の団地

上記した以外の団地では本格調査が行われておらず、確認調査や小規模な試掘・立会調査に留まるか、あるいは全く調査の行われたことのない団地である。

① 持田団地

松山市持田町1丁目5番22号にあたり、教育学部附属中・小・幼・養護学校が所在する。

1996年に、団地北東側の隣接した地点で松山市埋蔵文化財センターが中世（14世紀前後）の水田跡を調査している。大学構内でも、その水田層に相当する土層が持田団地の北半部に広がることが、1993年度の確認調査（調査番号：99309）と1997年度の試掘調査（調査番号：99706）によって確認されている。なお、団地南半部は石手川氾濫原が及んでいる。

② 御幸団地

松山市御幸町2丁目3番15号、学生寄宿舎が所在する。2000年度の立会調査（調査番号：00008）で、団地西半部において、中世（13・14世紀前後）の水田層が広がる可能性の高いことを確認している。

③ 米野団地

松山市米野町乙184番地1号、農学部附属演習林が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

④ 梅津寺団地

松山市梅津寺1861番地、大学課外活動施設が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑤ 北持田団地

松山市北持田町128番地1号、職員宿舎が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑥ 東長戸団地

松山市東長戸4丁目3番1号、教職員宿舎が所在する。1994年度の立会調査（調査番号：99402）によって、団地東半部を中心として遺跡が営まれている可能性が指摘できる。

⑦ 喜与団地

松山市喜与町1丁目8番8号、教職員宿舎が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑧ 山越団地

松山市山越4丁目11番10号にあたり、大学課外活動施設の野球場・馬場・サッカーグラウンド等の施設がある。

1992年度と2002年度の構内遺跡確認調査（調査番号：99205・00208）等によって、団地が丘陵部裾から延びる段丘の落ち際に位置することが明らかとなっている。団地北東隅には、弥生時代の遺構が存在する微高地があり、その南側の旧河道の埋没過程で

は、縄文時代晚期～弥生時代の包含層が堆積し、その上に水田層が認められる。一方、団地西半部でも、古墳時代に埋没した自然河道が確認されている。

⑨ 中島団地

温泉郡中島町大字小浜字瀬戸木の、理学部附属臨海実験所が所在する団地。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑩ 重信団地

温泉郡重信町大字志津川の、医学部および附属病院が所在する団地である。これまで数回の試掘調査あるいは確認調査を行ってきたが、遺跡の存在は確認されていない。ただし、団地東北部分には遺跡が残る可能性がある。

⑪ 溝辺団地

松山市溝辺町乙298番地、農学部附属高等学校の校舎がある。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑫ 横河原団地

温泉郡重信町大字横河原字横川、教職員宿舎が所在する。現在の重信川の氾濫原上にあり、埋蔵文化財は分布していない。

⑬ 北条団地

北条市八反地字伊利甲498番地、農学部附属農場が所在する。調査歴はないが、団地の一部は、萩尾古墳群あるいは八竹山遺跡として埋蔵文化財包蔵地に含まれている。

⑭ 津田山団地

松山市北斎院町津田山の、教育学部附属養護学校施設が所在する団地。2件の試掘調査（調査番号：99102・99411）を実施しているが、埋蔵文化財の分布は確認されていない。

⑮ 伊予団地

伊予市森字下新田729番地、大学課外活動施設が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑯ 大井野団地

松山市大井野町乙145番地2号、農学部附属演習林が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑰ 東野団地

松山市東野4丁目222番地、農学部附属演習林が所在する。調査はなされていないが、団地および周辺は、お茶屋台古墳群として埋蔵文化財包蔵地とされている。

（吉田）

表8 愛媛大学構内における調査一覧（2003年12月末時点）

調査番号	遺跡名次数	団地	工 事 名	調査種別	調査担当	面積 (m ²)	調査期間	文献
EU-97501	文京遺跡1次	城北	工学部海洋工学科校舎新営工事	本格	長井数秋 ^(注1)	750	19750801～19750824	1
EU-98001	文京遺跡2次	城北	工学部資源化学科校舎新営工事	本格	西尾幸則 ^(注1)	600	19800708～19800930	5
EU-98101	文京遺跡3次	城北	法文学部校舎新営工事	本格	西尾	800	19820110～19820325	5
EU-98301 98302	文京遺跡 文京遺跡	城北 城北	雨水管・污水管・ガス管埋設工事 教育学部校舎建設工事	立会 立会	西尾 西尾	1,374 —		
EU-98401	文京遺跡5次	城北	工学部危険物貯蔵庫新営工事	本格	西尾	18	19841026～19841028	5
EU-98601 98602 98603 98604 98605	文京遺跡6次 文京遺跡7次 文京遺跡8次 樽味遺跡 鳩子遺跡	城北 城北 城北 樽味 鳩子	城北地区基幹整備事業 工学部校舎増築工事 城北地区基幹整備事業 連合農学研究校舎新営工事 国際交流会館新営工事	本格 本格 本格 試掘 試掘	下條信行 ^(注2) 下條 下條 試掘 試掘	99 142 854 5 47	19861000 19860800～19860900 19861125～19870218 19870109 19870116	3
EU-98701 98702 98703 98704 98705 98706	鳩子遺跡1次 樽味遺跡 樽味遺跡 樽味遺跡1次 文京遺跡 文京遺跡9次	鳩子 樽味 樽味 樽味 城北 城北	国際交流会館新営工事 連合農学研究校舎新営工事 賜萬高等学校課外活動施設新営工事 連合農学研究校舎新営工事 城北地区プール廻り浄化装置増設工事 城北地区プール廻り浄化装置増設工事	本格 試掘 試掘 本格 試掘 本格	宮本一夫 下條信行 下條 宮本 宮本 宮本	962 18 6 684 2 62	19870720～19870920 19870820～19870821 19870820 19871028～19871217 19871113 19880111～19880129	2 7 7 2 7 3
EU-98801 98802 98803 98804 98805 98806	文京遺跡10次 文京遺跡 文京遺跡 文京遺跡 文京遺跡 文京遺跡	城北 城北 城北 城北 城北 城北	工学部情報工学科校舎新営工事 城北地区基準点等設置工事 工学部講義棟高圧ケーブル埋設工事(その1) 工学部講義棟高圧ケーブル埋設工事(その2) 工学部情報工学科校舎排水施設取設工事 工学部情報工学科校舎給水施設取設工事	本格 試掘 試掘 本格 試掘 立会 立会	宮本 宮本 宮本 宮本 宮本 宮本	1,075 5 2 1 6 3	19880919～19890303 19881013 19881208 19881212 19890207 19890209～19890210	4 7 7 7 7 7
EU-98901 98902	文京遺跡11次 文京遺跡	城北 城北	法文学部講義棟身障者用昇降機取設工事 城北地区電波障害用の外線工事	本格 立会	宮本 宮本	85 2	19890801～19890829 19900303	3 7
EU-99001	文京遺跡	城北	城北地区団地・教育学部自転車置場新設工事	試掘	宮本	3	19900808	7
EU-99101 99102 99103	樽味遺跡2次 津田山 文京遺跡	樽味 津田山 城北	農学部研究実験棟新営工事 教育学部附属農業部分室新営工事 城北地区団地改修工事	本格 試掘 試掘	田崎博之 下條 下條	506 13 36	19920107～19920228 19910608 19910821	6 7 7
EU-99201 99202 99203 99204 99205 99206 99207 99208 99209 99210 99211 99212 99213 99214	樽味遺跡 文京遺跡 樽味遺跡 重信 文京遺跡 樽味遺跡 樽味遺跡 文京遺跡 文京遺跡 持田 重信 文京遺跡 重信 文京遺跡 樽味遺跡	樽味 城北 樽味 重信 城北 山崎 樽味 樽味 文京遺跡 城北 持田 重信 城北 重信 文京遺跡 重信 樽味	農学部屋外ガス本管改修工事 城北地区東側圍壁改修工事 農業園芸部農業学部分室新営工事 医学部附属病院病室新営工事(その1) 城北地区東側围壁改修工事 1992年度構内遺跡確認調査(その1) 農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その1) 農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その2) 城北地区外灯設備改修工事 教育学部附属小学校給水設備工事 医学部附属病院駐車場取設工事 1992年度構内遺跡確認調査(その2) 城北地区情報通信設備工事 医学部附属病院病室新営工事(その2) 樽味園地自転車置場取設その他工事	立会 試掘 試掘 試掘 試掘 確認 立会 立会 立会 立会 立会 立会 立会 立会 立会 立会 立会 立会	田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎 田崎	6 3 1 3 3 57 3 2 2 11 40 55 12 7 33	19920526 19920730 19920626 19920826 19920730 19920828 19920921 19920921 19930126 19931026 19921027 19930120～19930121 19930309 19930322 19930323	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7

調査番号	遺跡名次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積(㎡)	調査期間	文献
EU-99215	文京遺跡	城北	城北団地交通規制遮断機取設工事	立会	田崎	2	19930324	7
EU-99301	重信		医学部看護学科舍新営工事	試掘	田崎	20	19930524	7
99302	梅味道跡	梅味	附属図書館農学部分館新営工事(樹木移植)	立会	田崎	14	19930624~19930625	7
99303	梅味道跡	梅味	農学部自転車置場取設工事	試掘	田崎	81	19930827	7
99304	梅味道跡3次	梅味	附属図書館農学部分館新営工事	本格	田崎	259	19930823~19931006	8
99305	文京遺跡	城北	城北団地大学会館裏道路整備(樹木移植)工事	立会	田崎	2	19931109	7
99306	梅味道跡	梅味	附属図書館農学部新営工事(外灯設備管路)工事	試掘	田崎	3	19931124	7
99307	梅味道跡	梅味	城北団地他情報通信電気設備工事	立会	田崎	7	19931124	7
99308	文京遺跡	城北	城北団地他情報通信電気設備工事(2)	立会	田崎	8	19931125	7
99309	持田・岩崎遺跡	持田	1993年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	39	19931224~19931225	7
99310	文京遺跡	城北	城北団地地情機器更新電源容量増設工事	立会	田崎	4	19940118~19940119	7
99311	梅味道跡	梅味	農学部附属図書館新営(排水管路)工事	立会	田崎	20	19940208~19940215	7
99312	梅味道跡	梅味	農学部附属図書館新営(自転車置場)工事(2)	立会	田崎	30	19940208	7
99313	文京遺跡	城北	城北団地基幹整備(屋外環境)工事	試掘	田崎	15	19940209~19940216	7
99314	文京遺跡	城北	工学部研究実験棟建設工事	試掘	田崎	38	19940329	7
EU-99401	桑原西稲葉遺跡3次	北吉井	東長戸他環境整備工事(その1)	立会	田崎	55	19940510~19940518	12
99402		東長戸	東長戸他環境整備工事(その2)	立会	田崎	9	19940517	7
99403	梅味道跡	梅味	環境整備(附属高等学校他自転車置場)工事	試掘	田崎	8	19940524	7
99404	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(卓車置場整備)工事	立会	田崎	1	19940607	7
99405	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(自転車置場設置)工事	試掘	田崎	81	19940608	7
99406	文京遺跡	城北	城北団地地盤環境監査(自転車置場設置・排水管設置)工事	立会	田崎	5	19940610	7
99407	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(排水井及び管路取設)工事	試掘	田崎	6	19940801	7
99408	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(電気配管路取設)工事	試掘	田崎	3	19940801	7
99409	文京遺跡	城北	工学部岩盤切削試験機設置工事	立会	田崎	1	19940927	7
99410	文京遺跡12次	城北	工学部校舎新営(I期)工事	本格	田崎	1,183	19941110~19950726	概7
99411		津田山	教育学部附属農業学校野外施設(東屋)設置工事	試掘	田崎	33	19950127	7
EU-99501	文京遺跡	城北	教育学部運動場内鉄棒移設工事	立会	田崎	48	19950411~19950412	10
99502	文京遺跡	城北	教養部テニスコート(事務局北側)改修工事	試掘	田崎	9	19950801	10
99503	文京遺跡	城北	工学部南側開闢工事	立会	田崎	3	19950801	10
99504	文京遺跡	城北	理学部構内井戸工事	試掘	田崎	4	19950802	10
99505		山越	山越地区防災ネット取設工事	試掘	田崎	7	19950802	10
99506	文京遺跡13次	城北	地域共同研究センター新営工事	本格	田崎	890	19951017~19950412	概10
99507	梅味道跡	梅味	公共下水道渠設置工事	試掘	田崎	2	19951114	10
99508	桑原西稲葉遺跡	北吉井	北吉井宿舍公共下水道設置工事	試掘	田崎	2	19951115	10
99509	文京遺跡	城北	城北団地北西通用門改修工事	立会	田崎	3	19951116	10
99510	文京遺跡	城北	組織文化財調査室改修工事	立会	田崎	1	19960131	10
99511	文京遺跡	城北	城北地区基幹整備(電線管等)工事	試掘	田崎	34	19960213~19960220	10
99512	文京遺跡	城北	城北団地事務局ガス管改修工事	立会	田崎	2	19960311	10
EU-99601	文京遺跡14次	城北	工学部校舎新営(Ⅱ期)工事	本格	吉田広・三吉秀光	1,349	19960520~19970331	10
99602		城北	1996年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	225	19961113~19961209	10
99603	梅味道跡	梅味	附属農業高等学校校舎新営工事	試掘	田崎	22	19961128~19961211	10
99604	梅味道跡	梅味	附属農業高等学校校舎新営工事	試掘	田崎	5	19961129	10
99605	梅味道跡	梅味	農学部構内光ケーブル敷設工事	試掘	田崎	1	19961129	10
99606	持田・岩崎遺跡	持田	教育学部附属中学校プール改修その他工事	立会	田崎	4	19970204	10
EU-99701	文京遺跡16A次	城北	工学部校舎新営(Ⅲ期)工事	本格	田崎	1,384	19970428~19971222	概11
99702	文京遺跡16B次	城北	工学部校舎新営(Ⅲ期)工事	本格	吉田・三吉	627	19970409~19970729	概11
99703	梅味道跡	梅味	ATMネットワーク工事	立会	田崎	131	19970414~19970417	11
99704	文京遺跡	城北	事務局案内板取設工事	立会	吉田・三吉	3	19970804	11
99705	持田・岩崎遺跡	持田	持田団地構内光ケーブル敷設工事	立会	吉田・三吉	5	19970804	11

調査番号	遺跡名次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積(m ²)	調査期間	文献
EU-99706	持田・岩崎遺跡	持田	持田团地北側周囲改修その他工事	試掘	吉田・三吉	6	19970805~19970806	11
99707	椿味遺跡	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	試掘	吉田・三吉	12	19970806~19970807	11
99708	椿味遺跡	椿味	椿味地区(拓翠寮)の公共下水道樹設置工事	立会	吉田・三吉	2	19970807	11
99709	文京遺跡	城北	工学部校舎新営電気設備工事(その2)	立会	吉田・三吉	12	19970818~19970821	11
99710	桑原西福音遺跡 4次	北吉井	北吉井宿舎屋外排水管改修工事	本格	吉田・三吉	100	19971008~19971031	12
99711	桑原西福音遺跡 5次	北吉井	北吉井宿舎屋外ガス管改修工事	立会	吉田・三吉	32	19971112~19971118	12
99712	椿味遺跡4次	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	本格	吉田・三吉	1,168	19971125~19980204	12
99713	椿味遺跡	椿味	附属農業高等学校運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設工事	試掘	吉田・三吉	6	19971218	11
99714	椿味遺跡	椿味	附属農業高等学校校舎埋蔵文化財調査に伴うアーチ壁等整備工事(農務舎及び車庫)	立会	吉田・三吉	187	19980204~19980206	11
99715	文京遺跡17次	城北	1997年度構内遺跡確認調査	確認	田崎・吉田・三吉	154	19980302~19980310	11
99716	椿味遺跡	椿味	附属農業高等学校運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設工事	立会	吉田・三吉	21	19970311~19970312	11
99717	文京遺跡	城北	工学部校舎新営に伴う外表施設整備工事	立会	吉田・三吉	-	19980217	11
EU-99801	文京遺跡	城北	「大正天皇お手植えの松」移植工事	立会	田崎・吉田	1	19981104	11
99802	文京遺跡18次	城北	総合情報処理センター新営工事	本格	田崎・三吉	1,192	19981214~19990802	既11
99803	文京遺跡	城北	工学部本館等事務室改修機械設備工事	立会	吉田	1	19981214	11
99804	椿味遺跡	椿味	遺伝子実験施設新営その他工事	試掘	吉田	22	19990128~19990129	11
99805	文京遺跡	城北	教育学部2号館南消火用水漏れ改修工事	立会	田崎・吉田	3	19990311	11
99806	文京遺跡	城北	教育学部本館南消火栓管路改修工事	立会	田崎	1	19990316	11
99807	椿味遺跡5次	椿味	遺伝子実験施設新営その他工事	本格	吉田	1	19990316~19990721	12
99808	重信遺跡	重信	医学部附属病院前桟建設工事	試掘	田崎・三吉	979	19990331~19990401	11
99809	文京遺跡	城北	学生会館ガス管改修工事	立会	吉田	1	19980631	11
EU-99901	文京遺跡19次I区	城北	理工学等総合研究実験棟新営電気設備工事	本格	吉田	31	19990907~19990913	13
99902	文京遺跡19次II区	城北	理工学等総合研究実験棟新営電気設備工事	本格	吉田・三吉	94	19991201~19991217	13
99903	椿味遺跡	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事(1期)	立会	吉田	1	19991006	13
99904	椿味遺跡	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事(2期)	立会	吉田	25	19991025~19991029	13
99905	椿味遺跡	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事(3期)	立会	吉田	31	19991124~19991128	13
99906	椿味遺跡	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事(4期)	立会	吉田	3	20000128	13
99907	文京遺跡	城北	「大正天皇お手植えの松」移植工事に伴う調査	立会	田崎・吉田	20	20000125	13
99908	文京遺跡	城北	理工学等総合実験棟新営電気設備工事(その2)	立会	田崎	8	20000201	13
99909	文京遺跡	城北	総合情報処理センター新営電気設備工事	立会	田崎・吉田	8	20000208	13
99910	文京遺跡20次	城北	サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリートー新営工事	本格	吉田・三吉	588	20000214~20000620	既13
99911	文京遺跡	城北	大会会場改修工事	試掘	田崎	9	20000216	13
99912	文京遺跡	城北	電灯移設工事	立会	田崎	1	20000216	13
99913	椿味遺跡	椿味	農学部冬期間における水田の貯水状態での生態観察実験のための仮説水田の設置	立会	田崎	1	20000310	13
99914	文京遺跡	城北	埋蔵文化財調査室情報通信設備工事	立会	田崎	19	20000313	13
99915	文京遺跡	城北	法文学部講義棟空調電源工事	立会	田崎	1	20000313	13
99916	椿味遺跡	椿味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	立会	吉田	1	19990507	13
EU-00001	文京遺跡	城北	大学会館改修機械設備工事	立会	田崎	9	20000829~20000830	13
00002	文京遺跡	城北	教育学部クレイティニスコート改修工事	試掘	吉田・三吉	2	20000913	13
00003	文京遺跡21次	城北	(城北) 総合研究棟新営(I期)工事	本格	田崎・吉田・三吉	1,870	20010115~20010609	既13
00004	文京遺跡	山越	山越運動場上水管修理工事	立会	吉田・三吉	7	20010115	13

調査番号	遺跡名次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積(m ²)	調査期間	文献
EU-00005 00006 00007	文京遺跡22次 文京遺跡	城北 城北 城北	2000年度構内遺跡確認調査 教育学部クレーンテニスコート改修工事 法文学部掲示板設置工事	確認 立会 立会	吉田・三吉 吉田・三吉 吉田・三吉	33 1 5	20010123～20010124 20010123～20010124 20010315	13 13 13
	文京遺跡	城北	同窓会連合会による五葉松移植工事	一	吉田・三吉	3	20010509	本書
	梅味遺跡	梅味	農学部新附建物新築予定	試掘	吉田・三吉	16	20010607	本書
EU-00101 00102 00103 00104 00105 00106 00107 00108	文京遺跡23次 文京遺跡	城北 城北 城北 城北 文京遺跡6次 梅味 城北 文京遺跡	四国電力による城北団地構内高圧線敷設工事 工字型屋外給水管設置工事 (城北)総合研究棟新営(Ⅱ)工事 農学部新附建物新営工事 事務局構内灯設置工事 教育学部4号館便所改修電気設備工事	本格 立会 立会 本格 本格 立会 立会	吉田・三吉 吉田・三吉 吉田・三吉 吉田・三吉 吉田・三吉 田崎 吉田 田崎	17 1 640 1,205 6 2	20010626～20010709 20010801 20011001～20020326 20011115～20022026 20011121～20011127 20020326	本書 本書 本書 本書 本書 本書
	梅味遺跡7次	梅味	農学部2号館改修工事	本格	田崎	170	20020403～20020523	本書
	文京遺跡25次	城北	(城北)情報教育棟新営工事	本格	吉田・三吉	1,022	20020603～20021218	本書
	文京遺跡	城北	(城北)情報教育棟用地埋蔵文化財調査に伴う土木工事	立会	吉田・三吉	1	20020515～20020517	本書
	文京遺跡26次	城北	(城北)総合研究棟等改修工事	本格	田崎	145	20020719～20020809	本書
	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟等改修電気設備工事	立会	田崎	3	20021021	本書
	文京遺跡	城北	(城北)情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営その他工事(その2)	試掘	田崎	1	20021127	本書
	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟新営電気設備工事	立会	田崎	2	20021129	本書
	山越遺跡	山越	2002年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	65	20021225～20021226	本書
	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟新営電気・機械設備工事	立会	田崎	23	20030123～20030129	本書
EU-00301 00302 00303 00304	文京遺跡	城北	(城北)情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営電気設備工事	立会	吉田	1	20030115	本書
	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟等改修電気設備工事	立会	田崎・三吉	2	20030303～20030304	本書
EU-00301 00302 00303 00304	文京遺跡27次	城北	(城北)総合研究実験棟新営工事	本格	吉田・三吉	703	20030529～20031024	
	文京遺跡	城北	(城北)総合研究実験棟新営工事	立会	吉田・三吉	39	20030527	
	文京遺跡	城北	放送大学愛媛学習センター新設工事	立会	田崎	3	20030905	
	文京遺跡28次	城北	理学部総合研究棟改修工事	本格	田崎	45	20031201～20031216	

註1 1975～1984までに行われたEU-97501～EU-98401の調査は、松山市教育委員会が担当。

註2 1986年に行われたEU-98601～EU-98605の調査は、法文学部人類考古学研究室による。

[文献]

- 森光晴・大山正風ほか 1976：文京遺跡、松山市文化財報告書、11
- 宮本一夫編 1989：魔子・梅味遺跡、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、I
- 宮本一夫編 1990：文京遺跡第8・9・11次調査、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、II
- 宮本一夫編 1991：文京遺跡第10次調査、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、III
- 栗田茂敏編 1992：文京遺跡－第2・3・5次調査、松山市文化財報告書、28
- 田崎博之編 1993：梅味遺跡II、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、IV
- 田崎博之編 1995：愛媛大学構内遺跡調査集報I、愛媛大学埋蔵文化財調査報告書、V
- 田崎博之編 1996：梅味遺跡III、愛媛大学埋蔵文化財調査報告書、VI
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室監修 1998：文京遺跡シンポジウム・弔生大集落の解明
- 吉田 広編 2001：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1995・1996年度－、愛媛大学埋蔵文化財調査報告書、VII
- 田崎博之編 2002：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1997・1998年度－、愛媛大学埋蔵文化財調査報告書、VIII
- 吉田 広編 2003：梅味遺跡IV、愛媛大学埋蔵文化財調査報告書、IX
- 田崎博之編 2003：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1999・2000年度－、愛媛大学埋蔵文化財調査報告書、X

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2001・2002年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XI

2004年2月27日

発行 愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577 松山市道後鍾又10-13

TEL 089-927-9127

印刷 七キ株式会社
〒790-8686 松山市湊町7-7-1
TEL 089-945-0112